

一般国道18号妙高野尻バイパス関係発掘調査報告書Ⅲ

東 浦 遺 跡

2 0 0 6

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

一般国道18号妙高野尻バイパス関係発掘調査報告書Ⅲ

ひがし うら  
東 浦 遺 跡

2 0 0 6

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

## 序

一般国道18号妙高野尻バイパスは、長野県上水内郡信濃町野尻と新潟県妙高市（旧妙高高原町）毛祝坂間の交通渋滞を緩和するために計画された全長4kmのバイパスです。平成2年度に工事が着工され、平成8年には全線が開通し、現在に至っています。

遺跡の分布調査・確認調査は平成3年度に実施し、平成4年度～7年度にかけて中ノ沢遺跡・大堀遺跡・東浦遺跡の3遺跡について本発掘調査を行いました。東浦遺跡を除く2遺跡についてはすでに発掘調査報告書を刊行しています。

本書は、この道路建設に先立って発掘調査した「東浦遺跡」の発掘調査報告書です。遺跡は新潟県側のバイパス起点近くに位置します。調査の結果、上層で平安時代の集落が、妙高火山性堆積物を挟んで下層から縄文時代前期の遺物が確認されました。上層では掘立柱建物やカマドが検出され、土師器椀などを中心としてたくさんの遺物が出土しました。これらの土器の在り方は、越後というより北信濃に近い様相を呈しており、地理的環境を反映しているものと言えます。

今回の調査結果が、当地域の歴史を解明するための資料として広く活用され、また文化財に対する理解と認識を深める契機となれば幸いと存じます。

最後に、発掘調査から本書の刊行までの間、多大なご協力とご援助を賜った地元の方々並びに旧妙高高原町教育委員会・妙高市教育委員会・国土交通省高田工事事務所に対して厚く御礼申し上げます。

平成18年6月

新潟県教育委員会

教育長 武 藤 克 己

## 例　　言

- 1 本書は新潟県妙高市（旧妙高高原町）毛梶坂字東浦31 ほかに所在する東浦遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は一般国道18号妙高野尻バイパス建設に伴い、新潟県が建設者（現国土交通省）から受託して実施したものである。
- 3 発掘調査は新潟県教育委員会（以下、県教委）が調査主体となり、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）が平成4年度に実施した。
- 4 整理および報告にかかる作業は平成17年度に実施し、埋文事業団職員がこれにあたったが、遺物の水洗・注記および接合の一部は平成4年度に終了している。
- 5 出土遺物と調査にかかる資料は、すべて県教委が保管・管理している。遺物の注記号は「東ウラ」とし、出土地点・層位などを併記した。
- 6 グリッド杭の打設は、面中郷測量に委託した。
- 7 本書で示す方位はすべて真北である。ここで言う真北は国家座標系のX軸方向である。
- 8 既成の地図を使用したものについては、その出典を記した。
- 9 文中の注釈はページ毎の脚注とした。また、引用参考文献は著者および発行年を文中に〔 〕で示し、巻末に一括して掲載した。
- 10 遺物番号はすべて通し番号とし、写真図版の番号も一致している。遺物実測図の縮尺は各図版に明記し、写真的縮尺もおよそ同一とした。
- 11 本書の執筆・編集は埋文事業団高橋保整理担当課長代理が行った。
- 12 本遺跡については、平成4年度『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』〔小田1993〕に概要報告があるが、本書の記述をもって正式な報告とする。
- 13 現地調査における遺跡地の地質については妙高火山研究所の早津賢二氏からご教示をいただいた。また、遺物については荒澤正史氏（上越市教育委員会）、矢口忠良氏（長野市教育委員会）から御指導いただいた。
- 14 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多大なご教示とご協力を賜った。厚く御礼申し上げる。

荒澤 正史　早津 賢二　矢口 忠良　山本 幸俊　国土交通省高田工事事務所  
旧妙高高原町教育委員会　妙高市教育委員会

## 目 次

### 第Ⅰ章 序 説

1 調査に至る経緯	1
2 調査の経緯	2
A 一次調査	2
B 二次調査	3
C 調査体制	3
D 整理作業	4

### 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1 地理的環境	5
2 遺跡の分布	5

### 第Ⅲ章 調査の概要

1 グリッドの設定	9
2 基本層序	9

### 第Ⅳ章 遺 構

1 概 要	11
2 遺構各説	11

### 第Ⅴ章 遺 物

1 上 層	14
A 古代の土器	14
B その他の遺物	18
2 下 層	18

### 第VI章 ま と め

1 縄文時代	19
2 古 代	19
A 土師器焼について	19
B 土器の器種構成比率と遺物の年代	21
C 遺跡の性格	22

《要 約》	24
-------	----

《引用・参考文献》	24
-----------	----

《別表 遺物観察表》	26
------------	----

## 挿図目次

第1図 遺跡の位置	1	第6図 基本層序土層断面図	10
第2図 一次調査トレーン設定図	2	第7図 道構模式図	13
第3図 追加トレーン設定および本調査範囲図	3	第8図 土器分類図	16
第4図 周辺の遺跡分布図	6	第9図 土器概分類図	20
第5図 グリッド設定図	9		

## 表 目 次

第1表 古代土器分類表	15	第4表 出出土器全体割合	22
第2表 土器概分類別割合	19	第5表 屋代遺跡群土器編年	22
第3表 土器の実測個体数と残存率による 個体数の比較	21		

## 図版目次

【図面】	
図版1 道構全体図(1)	図版11 道構分割図(4)(下層調査範囲)
図版2 道構全体図(2)	図版12 上層道構出土土器(1)
図版3 道構分割図(1)	図版13 上層道構出土土器(2)
図版4 道構分割図(2)	図版14 上層道構出土土器(3)
図版5 道構分割図(3)	図版15 上層道構出土土器(4)
図版6 道構個別図(1)	図版16 上層道構出土土器(5)
図版7 道構個別図(2)	図版17 上層道構出土土器(6)
図版8 道構個別図(3)	図版18 上層道構出土土器(7)
図版9 道構個別図(4)	図版19 上層道構出土土器(8)
図版10 道構個別図(5)	図版20 上層道構出土土器(9)・包含層出土土器他
	図版21 下層出土遺物

## 【写真】

図版22 SB1 6・7区完掘状況	
図版23 確認調査全景(南から) 基本層序(3区) 1~3区全景 1~2区全景 4区全景 SD1 SK2	
図版24 SK2 SK3 SK4 SK5	
図版25 SB1P1 SB1P2 SB1P3 SB1P4 SB1P5 SB1P6・7 SB1P8 SB1P9	
図版26 SB1P10 SB1P11 SB1P12 SB1P13 SB1P14 SB1P15 SB1	
図版27 P3(P3区) P34(P3区) P35(P3区) P38(P3区) P42(P3区) P43(P3区) P3区柱穴群・SD4	
図版28 カマド	
図版29 SD4・5 SD4 溝(旧河道)	
図版30 溝(旧河道) 下層(P2区)	
図版31 上層土器(1) P56・SD5・カマド	
図版32 上層土器(2) カマド	
図版33 上層土器(3) 溝第4地点・溝第3地点	
図版34 上層土器(4) 溝第3地点	
図版35 上層土器(5) 溝第3地点	
図版36 上層土器(6) 溝第3地点・溝第2地点	
図版37 上層土器(7) 溝第2地点	
図版38 上層土器(8) 溝第2地点・溝第1地点	
図版39 上層土器(9) 溝第1地点・包含層	
図版40 上層土器(10) 他包含層 下層土器・石器 包含層	

# 第Ⅰ章 序 説

## 1 調査に至る経緯

一般国道18号妙高野尻バイパスは、妙高市（旧妙高高原町）と長野県上水内郡信濃町を結ぶ延長4kmのルートで、昭和55年度に承認、昭和58年度に事業化され、平成2年度に工事が着工された。供用したのは平成8年度である。

妙高野尻バイパスの建設に先立ち、平成3年1月4日付けで建設省北陸地方建設局（現国土交通省北陸地方整備局）（以下「北陸地建」）から県教育委員会（以下「県教委」）に法線内の遺跡分布調査依頼があった。これを受けて県教委は平成3年6月13日に法線内の分布調査を実施し、平成3年7月1日付けで北陸地建に分布調査結果の回答を行った。分布調査結果は新発見の遺跡が2か所、試掘の必要な地点が5か所であった。この新発見の遺跡2か所のうちの1か所（№1地区）が東浦遺跡である。

分布調査の結果を受けた北陸地建からは、この№1地区が現国道18号との分岐点にあたり、ここの調査が終了しないと毛祝坂トンネルの工事に着手できないため、年内に確認調査だけでも実施してほしい旨要望があった。遺跡確認調査は、平成3年11月11日から22日まで確認調査を必要とした7地点について



第1図 遺跡の位置

[国土地理院発行「赤倉」原図]

て実施し、平成4年1月29日付けで北陸地建に回答した。このうちNo.1地区では、平安時代・繩文時代の遺物が出土し、本発掘調査が必要（北半部）とした。しかし、未買収地のある南半部については結論が出せず、追加確認調査が必要とした。

北陸地建からは、No.1地区について、平成4年度に本発掘調査を実施してほしい旨強い要望がなされ、平成4年7月から、本発掘調査を行うことになった。なお、未買収地を含む南半部の確認調査は本発掘調査の中で先駆けて実施することとした。確認調査部分を含めた調査対象面積は17,500m<sup>2</sup>である。遺跡名は近接して東浦遺跡、宮北遺跡が周知遺跡として存在したが、今回の確認調査で2遺跡が連続した遺跡であることが判明したため、統合して東浦遺跡とした。

## 2 調査の経過

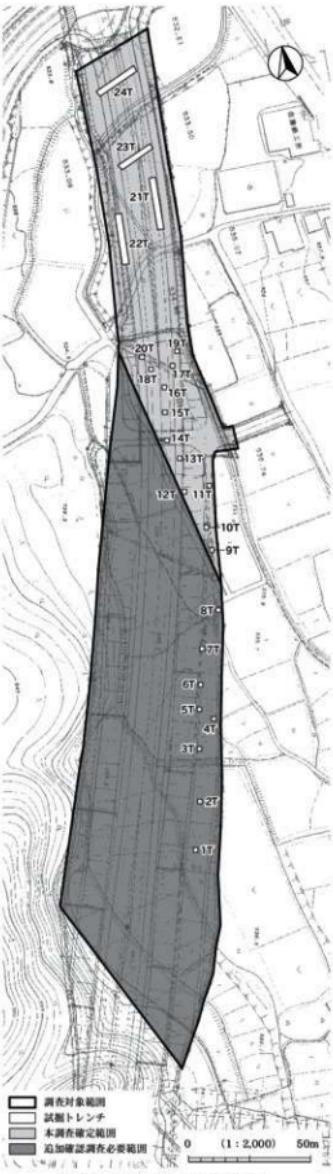
### A 一次調査

当地区は、分布調査の結果遺物が採集され、確認調査が必要としたNo.1地区である。確認調査は平成3年11月11日から22日まで他地点も含めて実施した。

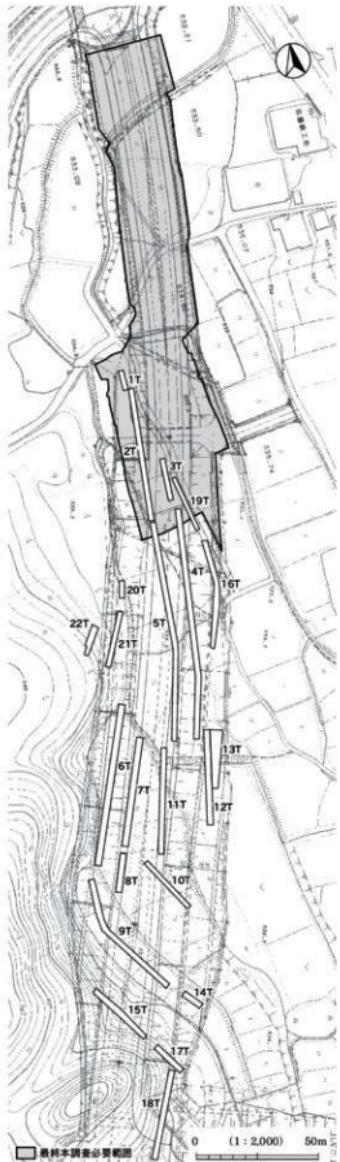
No.1地区の対象範囲17,500m<sup>2</sup>の内、未買収地（南区）を除く範囲に任意にトレンチを設定し、重機及び人力で調査を行った。設定トレンチは24で、調査面積224m<sup>2</sup>、確認率1.28%である（第2図）。

調査の結果、9T以北のトレンチでは、平安時代の土師器を中心に、テンバコ1箱程度の遺物が出土した。また繩文後期の土器も一部で出土した。包含層は水田床土下の黒色土層（Ⅲ層）である。1から8トレンチではほとんど遺物の出土は見られなかったが、南半部全体の結論を出すに至らなかった。このことから北半部は本調査必要、南半部は追加確認調査が必要とした。

追加確認調査は、平成4年の本調査に先駆けて7月から8月にかけて実施した（第3図）。調査の結果、一番南側の9・17トレンチで近世陶磁器が出土したが、中世以前の遺物は確認されなかった。12トレンチでは珠洲焼きが出土し、拡張のかたちで13トレンチを調査した。その結果、土師器の集中が見られた。1・



第2図 一次調査トレンチ設定図



第3図 追加トレーンチ設定および本調査範囲図

2・3・19トレーンチでは、平安時代の遺物が多く出土した。しかし、16・4・5トレーンチでは遺構・遺物の検出はなく、13トレーンチとはつながらないことが判明した。この結果から、平成3年度に本調査必要範囲とした北側に連続する19トレーンチまでを本調査対象とした。本調査面積は延6,830m<sup>2</sup>となった。

## B 二次調査

追加確認調査終了後の9月から本格的に、二次調査を開始した。各調査区について重機および人力で掘削を開始した。1・4・5区については、遺構は検出されず、遺物も少なく、すぐに完了した。2・3・6・7区はほぼ並行して調査を進めた。2区については一部遺物の集中が見られ、住居跡の可能性もあったが、調査の結果住居でないことが判明し、土坑・ピットが少数確認された程度で、ほぼ9月いっぱいで終了した。3区も土坑・ピットが少数確認されたのみであった。火砕流下調査のトレーンチにおいても遺構・遺物は確認されず、ほぼ10月いっぱいで調査を終了した。6・7区では、蛇行する旧河道路跡が確認され、遺物も多く出土したため、時間を費やした。また、掘立柱建物や、遺物の集中した地点でカマドが確認され、集落の様子が明らかとなった。また、火砕流下の下層でも縄文前期の土器が確認され、調査は11月の後半までずれ込んだが、なんとか終了することができた。

## C 調査体制

以下のとおりである。

### 一次調査

	平成3年度
調査期間	11月11日～22日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 堀川徹夫）
総 括	大島 圭己（県教育庁文化行政課長）
管 理	吉倉 長幸（県教育庁文化行政課長補佐）
調査指導	本間 信昭 （県教育庁文化行政課埋蔵文化財第2係長）
調査担当	藤巻 正信（県教育庁文化行政課主任）
調査職員	三浦 泰介（県教育庁文化行政課専門員） 伊藤 秀和（県教育庁文化行政課嘱託員）
庶 務	白石 雄蔵（県教育庁文化行政課主任）

## 二次調査

	平成4年度
調査期間	7月6日～11月20日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 本間栄三郎）
調査	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 本間栄三郎）
管理	藍原 直木（事務局長） 渡辺 耕吉（総務課長） 茂田井信彦（調査課長）
調査指導	藤巻 正信（調査課第2係長）
調査担当	小田由美子（調査課第2係文化財専門員）
調査職員	三浦 泰介（同上） 佐藤 執二（同 嘱託員）
庶務	藤田 守彦（総務課主事）

## D 整理作業

遺物の注記及び一部接合・復元は発掘調査年度を行っていたため、残りの整理作業は平成17年度に埋蔵文化財センターにおいて実施した。遺物については、事業団職員が接合・復元、実測遺物の選出・図化・トレイス・写真撮影を行った。遺物の写真撮影にはデジタルカメラを使用した。版組は株式会社セビアスである。遺構の図面作業は原図及び版作成を事業団職員が行い、トレイス・版組は株式会社セビアスである。本文・図版を含む全ての編集を行った後、編集委託業者からはデジタルデータ（DTP）で納品を受けた。なお、当事業団は本文・図版のレイアウトを含む編集作業を行い、以下の資料をセビアスに支給した。

本文・挿図：テキスト形式・Microsoft社エクセル形式データ、貼り込み図版

遺構図面図版：原図・レイアウト図案・文字データ

遺物図面図版：トレイス図・レイアウト図案・拓影・文字データ

遺構写真図版：遺構写真的CDR・レイアウト図案

遺物写真図版：写真ネガ・MO・レイアウト図案

整理期間	平成17年11月1日～平成18年3月31日
整理主体	新潟県教育委員会（教育長 武藤 克己）
整理実施機関	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 武藤 克己）
総括	波多 俊二（事務局長）
管理	長谷川二三夫（総務課長）
整理総括	藤巻 正信（調査課長）
整理担当	高橋 保（同整理担当課長代理）
作業	木山 京子 渡辺 知子 渡辺 和子 小倉 真子 小林智恵子（以上嘱託員）
庶務	長谷川 靖（総務班長）

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 1 地理的環境

遺跡の所在する妙高市（旧妙高高原町）は、新潟県の南西部、長野県に接する山間部に位置する。平成17年4月1日に旧新井市・旧妙高高原町・旧妙高村が合併して妙高市が誕生した。

市の中心部を流れる関川は、焼山を起源として妙高山の南裾を巡り、北流して上越市から日本海に注ぐ。左岸の西側には標高1,000～2,000m級の山々が連なり、その南側に標高2,454mの妙高山がそびえる。右岸東側には、通称関田山脈と呼ばれる標高1,000m級の山々が連なる。

この地域を象徴する妙高山は活火山として活動を継続しているが、その形成史を〔早津1985〕によりみてみると、第Ⅰ期から第Ⅳ期までの4つの活動期と各活動期の間に挟まれる3つの活動休止期からなっており、現在は第Ⅳ活動期の終末期にある。第Ⅰ活動期は今からおよそ30～50万年前、第Ⅱ活動期はおよそ12から13万年前、第Ⅲ活動期はおよそ7～8万年から5～5.5万年前、第Ⅳ活動期がおよそ3.2万年前からである。発掘調査で認められるのはほとんど第Ⅳ活動期のものである。確認できる妙高山最後の噴火は、中央火口丘上に開口した火口でなされた水蒸気爆発で、大谷火山灰層を形成した。約2,600～3,000年前である。遺跡に關係するのはこの第Ⅳ期の堆積物で遺跡の關係は以下のようになる。

大田切火砕流堆積物は妙高山東から北東方向に向けて分布し、C<sup>14</sup>年代では4,000～4,500年前と言う数字が得られ、縄文時代中期～後期初頭の年代が与えられている。しかし、発掘調査において年代を絞り込むことはできていない。

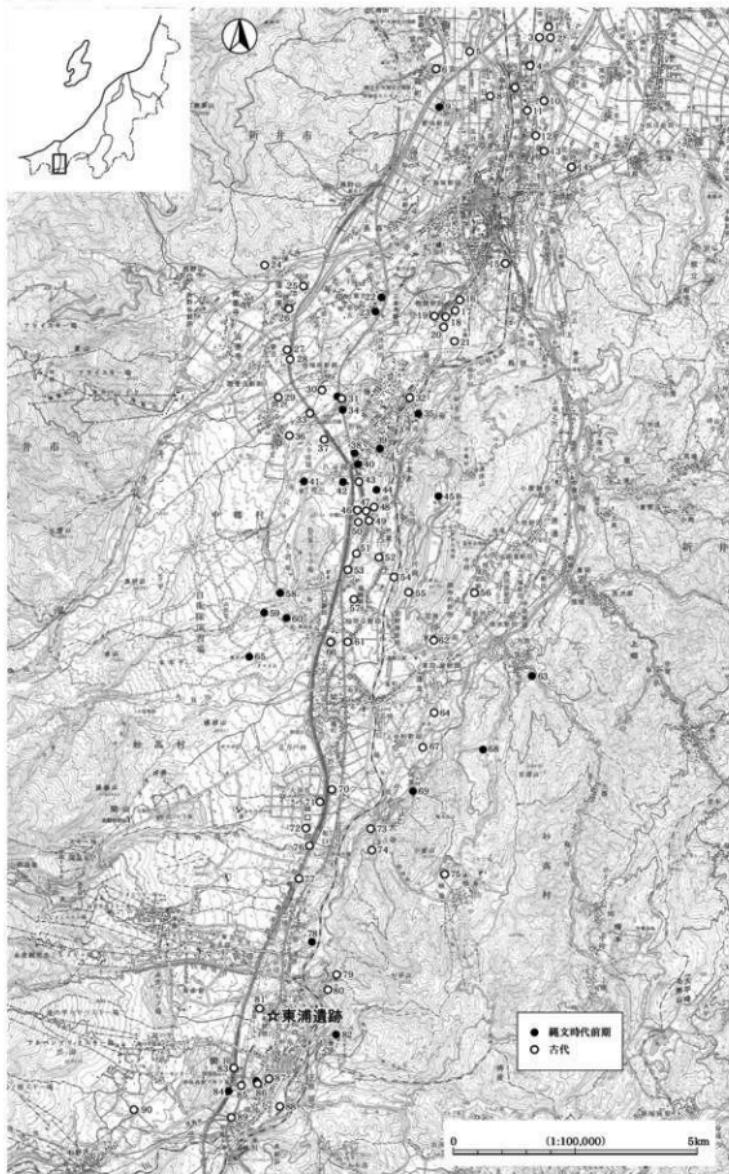
赤倉火砕流堆積物は、妙高山の東麓に広く分布し、北は片貝川から南は旧妙高高原町大字関川までの範囲で確認されている。考古遺物から見た時期は從来縄文時代早期～前期初頭と考えられてきたが、関川谷内遺跡でこの赤倉火砕流堆積物が前期中葉の有尾式土器を包含する層を覆っていることが確認され、有尾式期より新しく、諸磯C式期より古いことが明らかとなった〔小池・江口1998〕。東浦遺跡では、火砕流下に縄文前期の土器が出土したことから、この火砕流は大田切火砕流および赤倉火砕流の可能性が大きい。

田口岩屑なだれ堆積物は、大堀遺跡の発掘調査結果〔立木（土橋）・寺崎ほか1996〕により再定義されたものである〔早津1994〕。田口岩屑なだれ堆積物のC<sup>14</sup>年代は7,780±160y.BP (Gak-7545) [早津・古川1981] が得られている。中ノ沢・関川谷内遺跡では田口岩屑なだれ堆積物の上面で表裏縄文が出土しており、表裏縄文がこれより新しいことがわかる。以上詳細については、既刊一般国道18号妙高野尻バイパスおよび上信越道関係報告書を参照されたい。

### 2 遺跡の分布

東浦遺跡では、上層で平安時代の遺構・遺物が、火砕流下で縄文前期の遺物が出土している。ここで周辺の当該期の遺跡分布を見てみたい。

2 遺跡の分布



第4図 周辺の遺跡分布図（犬山時代前期および古代）

（国土地理院発行「高田東部」「高田東部」「妙高山」「飯山」各1/50,000原図）

## 縄文前期

縄文前期の遺跡は県境から旧新井市までの間に23遺跡を数えるに過ぎない。特に旧妙高村・妙高高原町では10遺跡と少ない。大田切川以南の関川左岸は、ほとんどが田口岩屑なだれ堆積物及び赤倉火碎流堆積物で覆われているため、発掘調査以外では遺跡が発見されることはない。82は関川右岸の兼保A遺跡〔室岡・本間1976〕で、前期末から中期・後期前半の土器が出土している。関川谷内遺跡A地点〔小池・江口1998〕(84)では、縄文早期の貝殻沈線文系土器、条痕文系土器、前期の羽状縄文系土器、諸磯、十三菩提系土器、中期、後期、晩期の土器が出土している。大田切川以北では、56から60の5遺跡が確認されている。この付近は、矢代川岩屑流堆積物( $C^{14}$ ではおよそ18000~20000年前)の載る地点と考えられ、新しい岩屑流堆積物は認められない。元屋敷遺跡(58)は前期から晩期、松ヶ峰A遺跡(60)は早期から前期、松ヶ峰D遺跡(59)は前期から中期、動的山A遺跡(65)は前期から中期、動的山B遺跡(65)は前期後半の遺跡である。

片貝川と渋江川に挟まれた地点には9遺跡が集中する。矢代川岩屑流堆積物の分布する地域である。西福田新田遺跡(31)〔立木(土橋)ほか1999〕は早期の遺跡で落し穴が検出された。郷清水遺跡(34)〔立木(土橋)ほか1999〕でも落し穴が確認されている。上中島遺跡(40)〔飯坂・島田ほか2000〕では縄文草創期から晩期までの遺物が出土したが、前期の資料は少なく、前葉から後葉にかけてのものである。三本木新田B遺跡(23)〔立木(土橋)・寺崎1997〕・萩清水遺跡(22)〔立木(土橋)・寺崎1997〕は近接する遺跡で前期後葉の土器を中心に出土している。前期に関してはいずれも小規模な遺跡である。

なお、当該期の遺跡分布については〔寺崎1997〕に詳しい。

No.	旧市町村名	遺跡名	時代	No.	旧市町村名	遺跡名	時代	No.	旧市町村名	遺跡名	時代
1	新井市	上百々	平	31	中郷村	西福田新田	縄・奈良・平	61	中郷村	石田	平
2	新井市	倉田	平	32	中郷村	蟻塚B	奈良・平	62	妙高村	上ツ平	平
3	新井市	杉原	平	33	中郷村	前原	平	63	妙高村	松原	縄
4	新井市	栗原	奈良	34	中郷村	郷清水	縄	64	妙高村	折岳	奈良・平
5	新井市	岡崎新田	平	35	中郷村	上ノ原	縄	65	妙高村	動的山A・B	縄
6	新井市	地蔵院	奈良・平	36	中郷村	沙下	古代	66	妙高村	蘿峰	奈良・平
7	新井市	觀音堂	平	37	中郷村	野林	平	67	妙高村	寺懶	古代
8	新井市	堂庭	平	38	中郷村	八斗薪原	縄	68	妙高村	中古	縄
9	新井市	新保	縄	39	中郷村	外窪B	縄	69	妙高村	上沢	縄
10	新井市	国賀	平	40	中郷村	上中島	縄	70	妙高村	大洞原C	奈良・平
11	新井市	玉蹴手	平	41	中郷村	大沼	縄	71	妙高村	キノコ峠	奈良・平
12	新井市	高郷	平	42	中郷村	南野畔	縄	72	妙高村	大洞原A	奈良・平
13	新井市	宮ノ本	平	43	中郷村	上滝ノ沢	平	73	妙高村	向田	古代
14	新井市	田中前2	平	44	中郷村	若宮	縄	74	妙高村	城平	古代
15	新井市	広田	平	45	中郷村	寿池	縄	75	妙高村	北田	平
16	中郷村	松原	古代	46	中郷村	中の原A	平	76	妙高村	坂口新田	奈良・平
17	中郷村	中林	古代	47	中郷村	中の原C	奈良・平	77	妙高高原町	熊堂	平
18	中郷村	長窓	奈良・平	48	中郷村	丸木林A	平	78	妙高高原町	伏見	縄
19	中郷村	西林A・B・C	奈良・平	49	中郷村	中の原D	平	79	妙高高原町	大沢	平
20	中郷村	田久保	古代	50	中郷村	中の原B	平	80	妙高高原町	上の台	平
21	中郷村	船岡山	平	51	中郷村	雀畑A	平	81	妙高高原町	田口深沢	平
22	新井市	荻清水	縄	52	中郷村	麻町	平	82	妙高高原町	兼保A	縄
23	新井市	三本木新田B	縄	53	中郷村	小重	平	83	妙高高原町	関川谷内B	平
24	新井市	諏訪窓跡	平	54	中郷村	南田	平	84	妙高高原町	関川谷内A	縄
25	新井市	松之木	平	55	中郷村	えふ	平	85	妙高高原町	中の沢	平
26	新井市	南原	平	56	妙高村	久保	平	86	妙高高原町	中ノ沢東	縄~平
27	新井市	向原	平	57	中郷村	内川	平	87	妙高高原町	北原	平
28	新井市	道瀧	平	58	中郷村	元屋敷	縄	88	妙高高原町	大堀北	古代
29	中郷村	下林	平	59	妙高村	松ヶ峰D	縄	89	妙高高原町	大堀	平
30	中郷村	小丸山	平	60	妙高村	松ヶ峰A	縄	90	妙高高原町	谷内畑	奈良・平

周辺遺跡（縄文前期・古代）

## 古　代

古代の頸城郡には越後国府があったとされ、また郡内には10の郷が存在したと「倭名類聚抄」には記載がある。遺跡のある頸城南部地域については、「栗原郷」が旧新井市栗原付近に比定されているほかは明確でない。頸城南部は関川上流に行くに従い、土地の生産性は低くなっていたであろうから、郷自体が成立していたのかもわからない。しかし、近世には北国街道が通過していた地点であり、県境には関川関所の存在もあり、重要な交通路であったことが窺え、古代においてもその重要性は同じであったと考えられる。

さて、古代の遺跡は比較的多く確認されている。旧新井市の栗原遺跡（4）周辺には古墳時代から平安時代の遺跡が集中する。栗原遺跡は8世紀の遺跡で、多くの掘立柱建物や「郡」と書かれた墨書き土器などが出土し「郡衙関連遺跡」とされている。北側には杉明遺跡（3）【高橋1989】、上百々遺跡（1）【高橋1985】、倉田遺跡（2）【高橋1996】があるが、いずれも栗原遺跡関連である。倉田遺跡では掘立柱建物が多く確認され、円面鏡や栗原遺跡と同型の軒丸瓦も出土している。杉明遺跡は古墳時代から平安時代にわたる遺跡で、掘立柱建物や遺物では腰帶石鈎が出土している。宮ノ本遺跡（13）【高橋1993】も古墳時代～平安時代にわたる遺跡で多くの掘立柱建物が確認されている。これら旧新井市北部の古代遺跡は比較的規模の大きい掘立柱建物を伴うことが多い。頸城郡の中でも1つの核となる地域である。反対に旧新井市南部から県境にかけては、竪穴住居を主体とした比較的小規模な遺跡が多く、遺物では県境に近づくに従い信州との関連が強くなる。中ノ沢遺跡（85）【立木（土橋）・寺崎ほか1997】・大堀遺跡（89）・関川谷内遺跡（84）は9世紀後半の小規模な遺跡である。関川谷内遺跡では、竪穴住居が2軒確認されているが、住居から帶飾（腰帯石鈎）5点が出土したほか、鉄滓・青銅塊・銅製品等があり、竪穴住居2～3軒の集落としては特異的な存在である。

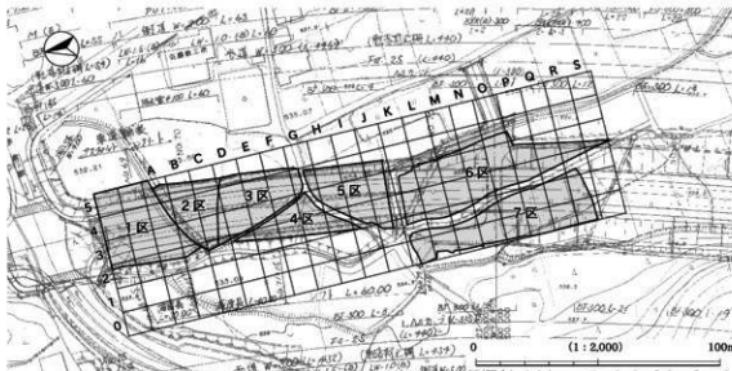
籠峰遺跡（66）は、旧中郷村の南部旧妙高村に近い場所に位置する。縄文時代後期を中心とした遺跡として知られ、一部県指定史跡となっている。ここでも古代の遺物が出土し、発掘調査後の検討から掘立柱建物の存在が確認され、ほかにも存在した可能性が指摘された【高橋2000】。掘立柱建物は2棟確認された。いずれも1×4間の南北棟である。時代は出土遺物から9世紀前半～9世紀後半にかけてである。土器は須恵器・土師器・灰釉陶器と当該地域の一般的な在り方を示すが、特殊なものとして円面鏡、墨書き土器、製塩土器がある。須恵器の中には小泊産のものも含まれる。円面鏡は一般集落では出土しないものであり、また製塩土器の内陸部での単独出土は官衙的性格の遺跡の場合が多い。このほか瓶類が多いことから酒宴が催されたことが予想され、公的施設や特権階級の存在が考えられた。東山道はその枝道が長野県信濃町付近まで延びていたことが推定されており、当然その延長として関川沿いを越後に入り北陸道と結ばれていた可能性が強く、遺跡の立地から駅家の存在も考えられ、桁行1間の建物は駅家施設によく見られることから、その関連の遺跡の可能性もあるとした。東浦遺跡もこのルート沿いにあり、やはり瓶類の出土頻度が高い。

## 第III章 調査の概要

### 1 グリッドの設定

グリッドは、道路法線に沿った方向で任意に設定した。まず、本調査必要範囲の一番北側に道路法線にはほぼ直交するかたちで東西ラインを設定し、それを基線として10mメッシュの大グリッドを設けた。記号は、東西方向が西から順にA～とした。大グリッドの中は2m毎の小グリッドで区切った。また、調査区内は任意に1～7区に区切った。

なお、グリッドの南北ラインは磁北に対して約29°西偏している。



第5図 グリッド設定図

### 2 基本層序

調査区内は平坦でなく、南から北へ、東から西に向って緩く傾斜する。遺跡は火山性堆積物を挟んで上下2枚確認された。上下層2枚確認した6区(図版2)及び3区(図版3)の深掘地点での層序を基本層序とした。

- I層：耕作土(黒色土)
- II層：黒褐色。土硬く締まる(平安時代遺物包含層)
- III層：茶褐色土。締まりなし(平安時代遺物包含層)
- IV層：白灰色火山灰層。均一でなくとぎれとぎれに認められる。
- V層：黒褐色土。締まりなく柔らかい。
- VI層：黄褐色土。かたく、粘性あり。
- VII層：黄褐色土。
- VIII層：黄灰色砂質土。砂粒粗い。

IX層：黄灰色火山灰層。粉っぽく、ザラザラしている。

IX'層：灰色砂質土。

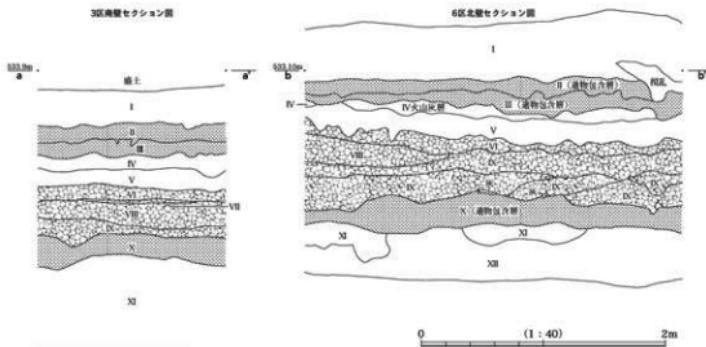
IX''層：暗灰色粘質土。

X層：黒色土。繊まりないが、粘性強い。黄褐色土粒子が混じる。(縄文前期遺物包含層)

XI層：黄褐色および青灰色粘質土。礫を多く含み、硬く締まる。

XII層：暗青緑灰色砂質土。礫を多く含む。

I層の耕作土下のII・III層が平安時代の遺物包含層である。IV層～IX層までが火山関連の堆積層である。その下X層が縄文時代前期の遺物包含層となる。従って、火山関連堆積層の中に大田切火砕流堆積物・赤倉火砕流堆積物が含まれている可能性が大きい。



第6図 基本層序土層断面図

# 第IV章 遺構

## 1 概要

当遺跡で確認された遺構は平安時代を中心としたもので、掘立柱建物（1棟以上）、石組みカマド（1基）、溝（5基）、土坑（5基）のみである。ほかに土器が多く出土した自然溝跡（旧河道）がある。

一番北側の1区では搅乱がかなり認められ、遺構は確認されなかった。2区では1区との間を流れる小川に沿った細い溝（SD1）が確認されたほか、土坑1基（SK1）やピット13基ほどが確認されたが、建物を認識するに至らない。遺物は北東側で細片がある程度まとまった出土を示した。

3区では土坑4基（SK2～5）、ピット20基程度を検出した。やはり建物等の検出はない。4・5区では全く遺構の検出はない。6・7区では遺構・遺物とも多く検出された。明確に建物と認識したものは1基（SB1）であるが、ほかにピットの集中か所があり、もう2～3基の建物が予想される。また、幅10mほどの溝（旧河道）が西側を蛇行しながら流れ、中から大量の遺物が出土した。また、一番南側では石組のカマドが単独で検出された。

なお、下層では縄文時代前期の遺物が出土したが、遺構は確認されなかった。

## 2 遺構各説

### SB1（図版4・6）

6区のL・M1・2区に所在する東西棟である。桁行4間（9.6m）、梁間2間（5.3m）で、中柱も中央を除いて存在する。床面積は約51m<sup>2</sup>である。柱間隔は北側桁行で西側から2m、2.4m、2.1m、3m、南側桁行で2m、2.1m、2.4m、3.2mと対称でない。梁間中央のP10及びP9は直線状に並ばず、やや張り出す。また西側の東柱は明確でない。柱穴は方形に近いもの、円形に近いものがあり企画性がない。規模は1辺80cm前後と比較的大きく、深さは30～40cmである。

### その他（図版4・5・7）

SB1のすぐ南隣に、P25・22・20・19が直線状に並び、東柱と考えられるP26・18がある。対となる南側の桁行が確認できないため建物として扱わなかつたが建物の可能性もある。軸方向はSB1と同じである。柱間隔は2.1mのほぼ等間隔である。柱穴規模はSB1よりやや小さい。

6区のP2・3付近にも柱穴群がある。東西方向に柱穴が並んでくるが柱の対応関係がうまくつかめず、建物として認識できなかった。柱穴の規模は径30cm前後と小さいが、深さは50cm前後としっかりしている。P35では、柱穴内に根固め石と思われるものがある。おそらく2棟くらいが存在したであろう。

### カマド（図版8・9）

Q2区で確認した。竪穴住居の施設として存在したのか、単独で存在したのかは明確でないが、石組のカマドの周囲に土器が散乱していたことからすると、単独で存在した可能性もある。カマドは石組のみ確認された。石は20cm前後の川原石で、両袖東西方向に並べている。東側が良く焼けていることから、東側が焚口と考えられる。そこで幅は約30cmで、中央に支脚に用いた角柱状の石が直立する。西側

は幅20cmと狭くなつており、煙道がついた可能性がある。周囲に柱穴もあるが、関係はつかめない。

**SK1** (図版3)

2区 2C5の調査区一番西側で確認された。調査区外に延びるため形状等不明。調査区ラインで長さ約1.2m、深さ15cmを測る。出土遺物はない。

**SK2** (図版3)

3区 3E14区に所在する。土坑として扱つたが、造構となるかどうか断定できない。長軸約2.2m、短軸約1mの略楕円形。詳細不明。

**SK3** (図版3・9)

3区 4F4区に所在する。長軸2.2m、短軸0.8mの略楕円形。深さは10cm前後と浅い。出土遺物はない。

**SK4** (図版3・9)

3区 3D10区に所在する。長軸1.6m、短軸1.2mの略楕円形。深さは10cm前後と浅い。覆土は茶褐色土で縫まりはない。出土遺物なし。

**SK5** (図版3・9)

3区 3・4D・E区交点上に所在する。長軸約2m、短軸約1mの不整形。深さは20cmと浅い。覆土は暗褐色土及び茶褐色土である。出土遺物はない。

**SD1** (図版3・9)

調査時に存在した1区と2区を区切る小川の南側を沿つて走る細い溝。幅約50cm、深さ約40cmで、断面形はU字状を呈する。覆土は暗褐色土で縫まりはない。近世以降の溝と考えられる。

**SD2・3** (図版4・10)

6・7区、SB1の西側で溝(旧河道)が大きく蛇行し、テラス状になった場所に所在する2本の溝で、蛇行にそつて弧状を描く。東側の溝SD3は延長約14m、幅約40cm、深さ約40cmの箱型を呈する。SD2はSD3を巻くように認められる。延長約18m、形状はSD3に近い。覆土はいずれも黒色土である。掘り込みはI層下であり、溝(旧河道)が埋没した後に掘られていることがわかる。また、覆土からは近代の陶磁器が出土しており、少なくとも近世以降であることは間違いない。

**SD4** (図版5・9)

6区 O・P2区の西側、溝(旧河道)の東岸に沿つて走る溝。確認延長約9m、幅約1.2mで溝(旧河道)に沿つて蛇行する。断面は箱型に近く、深さは約40cm、覆土は縫まりなく、黒色土と黄灰色砂質土が混じる。断面図から溝(旧河道)埋没後に掘られたことがわかる。

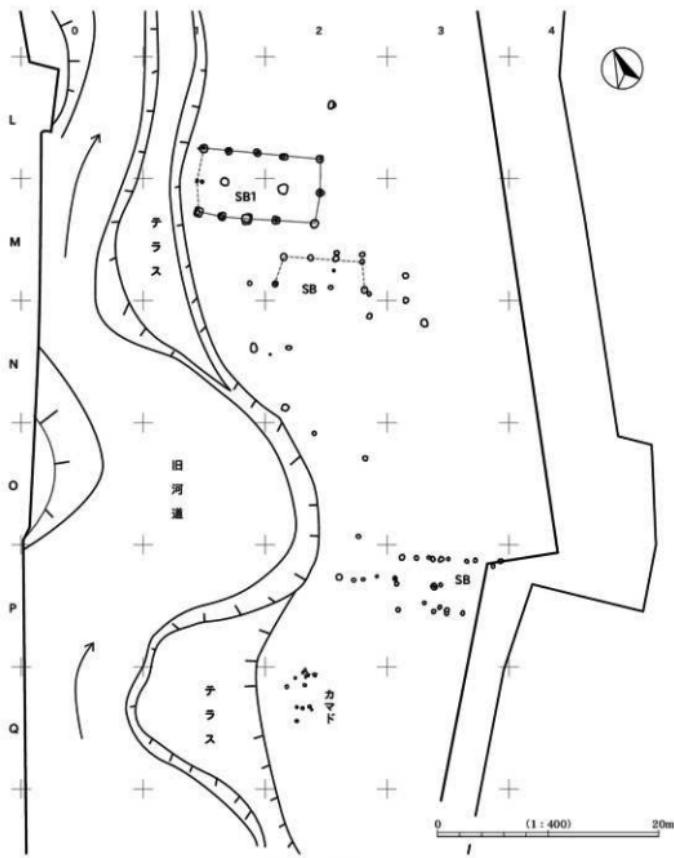
**SD5** (図版5・9)

6区 O・P区の境界線上を東西に走る溝。延長約15mで、西側は溝(旧河道)に接する。溝幅約20～40cm、断面は箱型に近く、深さは10cm前後と浅いが、SD4に近い西側では若干深くなる。断面図により、SD5がSD4より古いことがわかる。

**溝(旧河道)** (図版4・5・10)

6・7調査区西側を南北に蛇行しながら走る溝。現地形観察においてもその痕跡を留める。溝幅は広い地点で約18m、狭い地点で約11mを測る。溝断面は緩い皿状で、深さは約1.5mである。覆土は基本層序の順に堆積が認められる。最下層はVI層で火碎流である。III・IV層は細分される。上層では暗褐色土や黒褐色土であるのに対して、下層では砂質土や礫層であり、水が流れていた可能性が十分にある。地形的には南から北に向つて流れている。調査区の中では、2か所にテラス状の張り出し部が認められる。1か

所はSB1付近、1か所はカマド付近である。主要施設に近いことから船着き場の可能性も考えられる。<sup>1)</sup> 遺物はおもにⅢ～Ⅳ・Ⅴ層で出土している。全て土器類で木製品等は出土していない。出土分布には集中区があり、4地点に区切ったが特にSB1の付近とカマド付近に遺物の出土が多い。



第7図 造構模式図

1) 舟が利用可能であったかどうかは明確でない。道路内の溝は緩い傾斜を示すが、本流の閑川は急流である。近世には舟の利用は厳しく官制され、自由には利用できない状況にあった。閑川については、直江津の今町から新井市広島までが舟航許可範囲であり、これより上流は藩の許可が必要であった〔桑原2003〕。現在の河の状況で判断すると、これより上流部は引き舟であっても厳しいものがある。はたしてどこまで舟の利用が可能であったであろうか。小泊産の大甕は陸路で運ばれたであろうか。長野県飯山市でも小泊須恵器が出土しており、確認されている器種は甕のみである。その搬入ルートについて、坂井氏は信濃川ルートと頸城ルートの2つの可能性を指摘し、頸城ルートの可能性が高いとしている〔坂井1993〕。

# 第V章 遺物

当遺跡では、下層で縄文時代前期の上層からは縄文時代後期および平安時代の遺物が出土している。

## 1 上層

上層の遺物の多くは平安時代に属する。出土は包含層が少なく、カマド付近と近接して南北に流れる溝からの出土がほとんどである。溝での出土状況を見るとおよそ4地点に分布が分かれる（第2図）。遺構と溝出土及び包含層に分け説明を加える。

### A 古代の土器

#### 1) 分類（第1表、第8図）

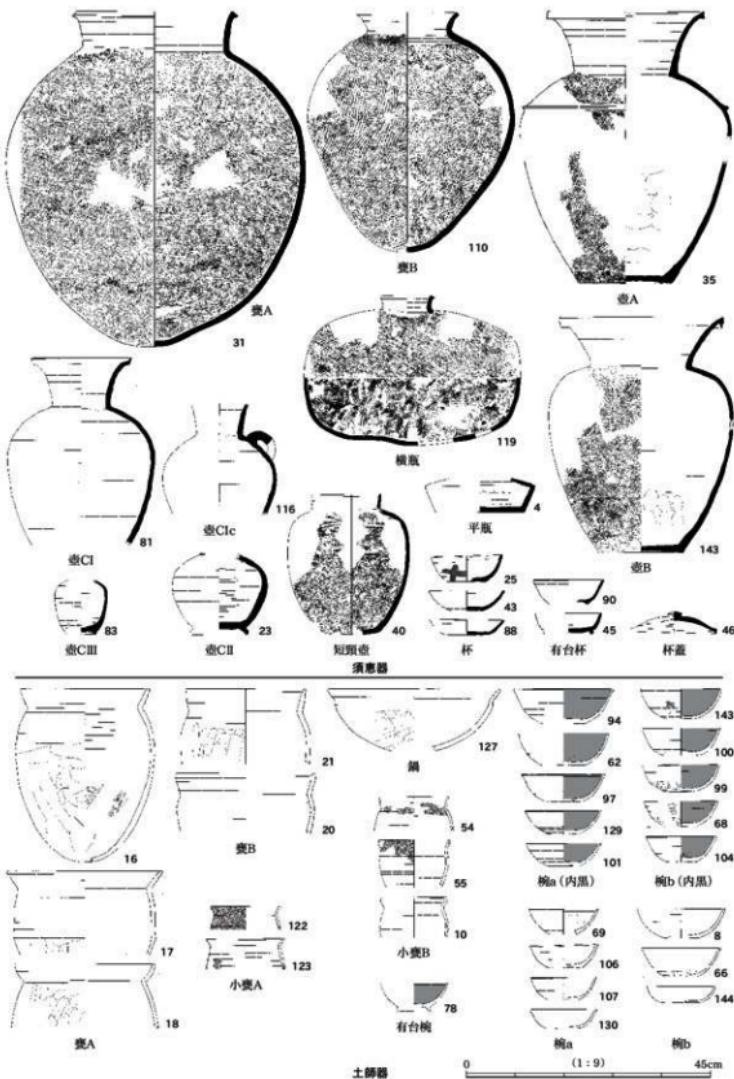
須恵器・土師器のみで、灰釉は壺と考えられる破片が出土しているが図化していない。須恵器には甕・壺・短頸壺・平瓶・杯・有台杯・蓋がある。甕には、容積70ℓを越える大形のものと、それ以下のものとがある。壺は大きさによりA～Dに分類した。C類はI～IIIに細分している。A類は平底で体部上半に突帯がつくものである。耳がつく可能性がある。B類は同形態で突帯がつかないもの。このA・B類は北信に多く認められる。甕と壺A・B類を比較すると、壺は平底で肩がやや張るもの、口縁部の開きや容量は甕と変わらない。用途として違いがあるのかどうかは検討する必要がある。壺C I類は体部最大径20cm以上で、口縁等の違いで3細分した。C II類は体部最大径15cm前後のもの。C III類は体部最大径が10cm以下の小形のものである。短頸甕は口縁部形態の違いでA・B類に分類した。平瓶は1個体のみである。杯及び土師器碗は口径により分類し、それに高さ口径比率を加味して細分した。第1表のとおりである。杯のうち底部ヘラ切りのE IV類は佐渡小泊産である。ほかの杯は全て糸切りで产地は明確でない。有台杯は点数少なく、A・Bに分類した。蓋は細分していない。

土師器には甕・小甕・鍋・椀・有台椀がある。甕と小甕は口径およそ15cmを境とした。甕及び小甕は口縁部形態の違いで各々A・B類に分類した。甕の口縁部は全て丸みを持ち、いわゆる「北信型」〔笠澤浩1988・坂井1993・笠澤正史1995〕と呼ばれるものである。小甕もほとんど北信型であるが、口縁端部がやや摘み上げられるものも一部存在する。鍋は口径によりA・B類に分類した。鍋も口縁端部に丸みを持つ。B類は口縁端部が三角形状で、あるいは鉢になる可能性もある。椀は須恵器碗とほぼ同様の分類基準であるが、それに底部調整を加味した。糸切りのみのものをa類、糸切りの後ケズリ調整を加えるものをb類とした。有台椀は分類していない。

なお、土器は1個の土器で各地点の破片が接合しているが、小破片でも遺構から出土しているものがあれば、その個体は遺構出土として扱った。溝出土については第1地点から第4地点があるが、上流部出土地点を優先した。接合関係は観察表で示した。

須恵器	壺	A	大形で体部叩き調整、丸底 よよそ容積70L以上
		B	体部叩き調整、丸底よよそ容積70L以下
	平底	A	平底で体部上半に突帯の付くもの。体部叩き調整
		B	平底で体部叩き調整
	盤	C	全てヨコナギ調整で、底部高台の付くもの
		I a	体部最大径がおよそ20cm以上で、口縁端部が垂直に立ちあがる。
		I b	体部最大径がおよそ20cm以上で、口縁端部断面三角形状となる。
		I c	体部最大径がおよそ20cm以上で、体部に環状把手が付くもの
		II	体部最大径がおよそ15cm前後のもの
		III	体部最大径がおよそ10cm以下と小形のもの
	短頸壺	A	口縁がやや外反する
		B	口縁が直立する。
	平瓶		底部高台が付かず、体部浅く、中央で区の字状に屈曲する。
		C	口径およそ14cm代で、口径高さ比率0.30～0.35のもの
	杯	III	口径およそ14cm代で、口径高さ比率0.25～0.30のもの
		D	口径およそ13cm代で、口径高さ比率0.36以上のもの
		I	口径およそ13cm代で、口径高さ比率0.25～0.30のもの
		III	口径およそ13cm以下で、口径高さ比率0.36以上のもの
	有台杯	E	口径およそ13cm以下で、口径高さ比率0.25～0.30のもの
		IV	口径およそ13cm以下で、口径高さ比率0.24以下のもの
	蓋	A	口径12cm前後で、口径高さ比率0.3以下のもの。底部から体部の立ち上がりが角張る
		B	口径13cm前後で、口径高さ比率0.3以上のもの。底部から体部の立ち上がりが丸み
土師器	壺	A	口径およそ15cm以上で口縁が外反するもの。体部上半ヨコナデ、下半ケズリ
		B	口径およそ15cm以上で口縁の外反少なく内湾ぎみ。体部上半ヨコナデ、下半ケズリ
		B'	口径およそ15cm以上で口縁の外反少なく内湾ぎみ。体部にまるみ。体部上半ヨコナデ、下半ケズリ
	小 壺	A	口径15cm以下で口縁部外反
		B	口径15cm以下で口縁部内湾味に直立
	鍋	A	口縁部外反し、体部に丸み。
		B	口縁部外反し、体部の字状に屈曲。薄手
	甌	A	口径16.5cm以上で口径高さ比率0.33～0.39で深みのあるもの。底部回転糸切り
		III	口径16.5cm以上で口径高さ比率0.33以下のもの。
		B	口径15.0～16.4cmで口径高さ比率0.33～0.39で深みのあるもの。底部回転糸切り
		II b	口径15.0～16.4cmで口径高さ比率0.33～0.39で深みのあるもの。底部回転糸切り後ケズリ
		C	口径14.0～14.9cmで口径高さ比率0.33～0.39で深みのあるもの。底部回転糸切り
		II b	口径14.0～14.9cmで口径高さ比率0.33～0.39で深みのあるもの。底部回転糸切り後ケズリ
	D	III a	口径14.0～14.9cmで口径高さ比率0.33以下で深みのあるもの。底部回転糸切り
		II a	口径13.0～13.9cmで口径高さ比率0.33～0.39で深みのあるもの。底部回転糸切り
		II b	口径13.0～13.9cmで口径高さ比率0.33～0.39で深みのあるもの。底部回転糸切り後ケズリ
		III a	口径13.0～13.9cmで口径高さ比率0.33以下で深みのあるもの。底部回転糸切り
	E	I a	口径13cm以下で口径高さ比率0.40以上で深いもの。底部回転糸きり
		I b	口径13cm以下で口径高さ比率0.40以上で深いもの。底部回転糸きり後ケズリ
		II a	口径13cm以下で口径高さ比率0.33～0.39で深みのあるもの。底部回転糸切り
		III	口径13cm以下で、口径高さ比率0.33以下のもの。
	有台碗		

第1表 古代土器分類表



第8圖 土器分類圖

## 2) 遺構出土土器 (図版 12-1 ~ 図版 20-132)

## P56 (1)

2N21区のピットからの出土である。壺B類の下半部と考えられる。底部平底で外面格子印き、内面ハケ調整である。

## SD5 (2)

小甕B類と考えられる。口縁はほぼ直立する。

## カマド (3~21)

カマド及び周囲で一括出土したものである。土師器甕が圧倒的に多い。3は壺B類。上半と下半は接合しないが突帯はないものと判断した。4は平瓶である。口縁は不明。7は土師器有台椀。8は椀で底部にケズリを加えるb類である。9・10が小甕、口縁形態に違いがある。11~21が甕である。11~19がA類で、口縁が外反するものである。下半部はいずれもケズリが加えられる。20・21がB類で口縁がほぼ直立する。

## 溝第4地点 (22~30)

最も上流部分にあたる。集中した出土ではなく、散在する。22~24は須恵器壺C II類。25は須恵器杯D1類。糸切り底で、体部に墨書「十」が認められる。26・27は土師器椀で26は内黒である。26下半部にはケズリが加えられる。28・30は小甕、29は甕である。

## 溝第3地点 (31~79)

カマドやピットが多く確認され、建物が存在したと考えられるP2・3地区に近い地点である。多くの遺物が集中している。31は大甕である。高さ 62cm、体部最大径 55.5cm を測り、容積は 80 ℥ くらいと思われる。33~40は甕である。33は壺口縁部と考えられる。35は突帯の廻るものである。36~39は壺C類。39は小型である。40は短頸甕と考えられる。下半部印き。41~44が須恵器杯。41~43はいずれも底部糸切り。44には外面墨書「合符」ほか文字が認められる。内面にも墨痕がある。45は有台杯。46は須恵器蓋。47~50が土師器甕。A・B類があるが、50は丸い体部を持ち、特異な器形。51~60が小甕。59は体部丸みが大きい。60は底部にやや丸み。61は鍋と考えられる。62~77が土師器椀。66・69を除いて全て内黒。底部調整はa・bともにある。78・79是有台椀でいずれも内黒。68の墨書は「忍」の逆字であろうか。79の底部には墨書「丈」がある。

## 溝第2地点 (80~109)

多くの遺物が出土している。80~83が須恵器甕。C I ~ C III類まである。81は口縁直立する。84は須恵器甕。85~89が須恵器杯。85~87が底部糸切り。88・89が底部ヘラ切りである。85~87は口縁高さ比率 0.25 以上、88・89は 0.24 以下である。90は有台杯。91は甕、92・93は小甕である。93は口縁の外反が大きい。94~109が土師器椀。106・107を除いて全て内黒。深みのあるII類が多く、浅いのは少ない。底部調整はa・b類共にある。

## 溝第1地点 (110~132)

最も下流のSB1に近い地点である。多くの遺物が出土している。110~112が須恵器甕。113~117が須恵器甕。116は体部に環状把手がつく。118は短頸甕である。119は横瓶。120は須恵器杯で底部ヘラ切り。121が土師器甕、122~124が小甕である。126~128は鍋。下半部はケズリ調整。129~132が土師器椀で、130を除いて内黒。

## 3) 包含層出土土器 (図版20—133～147)

133は須恵器甕口縁部。134・135は長頸壺。136・137が須恵器杯。138が有台杯である。139～141が土師器甕、142が小甕である。143は土師器内黒椀。145・146が有台椀でいずれも内黒。

147は土師器皿類である。底部糸切りで部分的に赤彩がある。中世以降と考えられる。

## B その他の遺物 (図版20—148～156)

148は土錐、149は砾石である。時期不明。150～152は木製品である。150は椀で、外面黒・内面赤漆である。151は品名不明。片面赤、片面黒漆である。152が小型曲物の底板であろう。これら木製品は近世以降の可能性が高い。

153～155は縄文土器。153は釣り手のつく注口土器。153d・eが釣り手部分である。体部に沈線三叉文が認められる。154は内面にみ沈線が走る。155も沈線、縄文が認められる。156は隆帶上に圧痕が連続している。縄文土器と考えられるが時期・系統不明。

## 2 下 層 (図版21—157～168)

いずれも火碎流下で出土したものであるが、遺構は確認されておらず、遺構出土はない。157～167は縄文のみでいずれも土器胎土内に植物繊維を含む。157は口縁に11個の小突起を持つ。外面は縄文RL・LRを用いた羽状縄文で、方向を変えた施文で菱目状となるところもある。内面には整形の擦痕が認められる。158は平口縁の小型深鉢。胸部は直線的に開く。口縁にそって半截竹管波状文がめぐり、それ以下は157と同様である。159は胸部やや膨らみを持つ。縄文施文は157・158と同じ。160～167はいずれも縄文施文である。160・161は内面擦痕が目立つ。162は口縁近くと考えられるが、かなり外反する。164・165は上下から摘み上げによる細い隆帶が認められる。168は蛇紋岩の磨製石斧。基部があまり細くならず、側面に広い面を持たない。また、刃部断面は左右対称とならない。

## 第VI章 まとめ

### 1 縄文時代

縄文時代の遺物は少ないが、上層と下層で出土している。上層の遺物（153～156）は、後期中葉の加曾利B式段階と考えられるものである。釣り手の付く注口土器（153）の類例は県内では少ない。156は、口縁部近くと考えられ、鎖状隆帯は加曾利B段階の深鉢に認められるが、当該期のものかどうかは、はつきりしない。

下層の土器のうち157～167は土器胎土に繊維を含んでいることから縄文前期中葉以前の可能性が大きい。157の口縁11個という数の多い小突起はあまり類例がない。ほとんど縄文のみで時期判定がむずかしいところである。前期前葉～中葉では、底部の在り方に変化のある時期であり、ある程度の時期絆り込みの材料となるため、[寺崎1999]によりその変化を見てみたい。まず、前期初頭の花積下層段階では底部丸底がほとんどである。前期前葉になると丸底や丸底風平底、揚底風平底が現れる。これら3形態は、いずれも底部に爪形などの刺突や圧痕を施すものが多い。底部に施文しない平底はほとんど無い。157は単純な平底でやや揚底気味である。前期後葉になると土器胎土に植物繊維を含まないのが一般的になることを考えれば、これらの土器は前期中葉段階にあたると考えられる。羽状縄文も結節でなく、単位当たりの施文幅も大きく、前葉とは異なる。土器型式では黒浜式や有尾式、県内では根小屋式が並行関係にある。157～159の3点はほぼ一括出土といって良く、大きさや器形の異なる3点の組合せが生活のセットということになる。

160～167は、157～159と出土地点が離れており、縄文原体が細かく薄手である。164・165では抜み上げまたは刺突による微隆帯が見られる。このような文様は前葉の布目・新谷遺跡等に認められるることから、これら土器は前葉まで溯源の可能性がある。

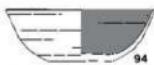
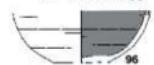
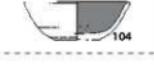
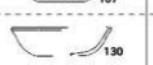
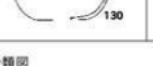
### 2 古代

#### A 土師器椀について

第9図は土師器椀の分類図である。形態は全て体部に丸みを持つものである。内黒とそうでないものがあり、その割合は内黒が約2/3を占める。口径の大きいA類は全て内黒である。B類では、内黒とそうでないものの両者があり、底部糸切りとケズリが存在する。形態はほぼ同じである。C・D類はほとんど内黒である。口径の小さいE類では、深身で内黒でないものが多い。これら土師器椀の出土地点はほとんど満第2・3地点である。SB1近くでは多くない。底部調整の糸切り・ケズリは信州でも同様で、屋代遺跡群〔鳥羽2000〕では、底面を持ちケズリのみで調整するものは9期（10世紀前半）まで見られ、底部と腰部に持ちケズリを持つものは8期後半（9世紀末）まで見られる。底部と腰部に回転ヘラケ

種別	器種	点数	割合	底部調整	点数	割合
土師器	内黒椀	46	0.73	糸切り	31	0.69
				ケズリ	14	0.31
	椀	17	0.27	糸切り	13	0.76
				ケズリ	4	0.24
		62	1.00		62	

第2表 土師器椀分類別割合（底部残存率による）

分類	土師器輪(内底)		土師器輪	
	糸切り(a)	糸切り→ケズリ(b)	糸切り(a)	糸切り→ケズリ(b)
A 16.5 cm 以上	II 0.39 以上 1.33 以下	  		
	III 0.33 以下			
	B 16.4 以下	II 62	 	
	C 14.9 以下	II 65	 14.0 以上	
	III 129			
	D 13.9 以下	II 102	 13.0 以上	
E 13.0 以下	III 0 以上			
	I 0.39 以上			
	II 1.33 以下		 	
	III 0 (1.6) 20cm			

第9図 土師器輪分類図

ズリを持つものは8期前半（9世紀後半）まで見られるとしている。したがって、单品でみた場合は調整のみで編年上の位置を限定することは困難としている。東浦遺跡の場合も、手持ちケズリと回転ヘラケズリの両者があり、このことからすれば8期前半～後半（9世紀後半～末）ということになる。

## B 土器の器種構成比率と遺物の年代

器種構成比率を出すには、まず個体数の算出が必要となる。全て完形品であれば容易である。しかし、実際には破片がほとんどで、算出は難しい。今回、残存率〔宇野1992〕による個体数と実測個体数を比較してみた（第3表）。それによると、土師器壺の実測点数は21に対して、口縁部残存率では11個体と実測個体数が倍近く上回った。椀を除いてすべて実測個体数が上回っている。小甕・椀・有台椀については、口縁部と底部とに分け、残存率を比較すると、底部残存率の方が2～3倍の個体数を表わしていることがわかる。どの基準で比較すべきかであるが、今回実測点数・口縁部残存率・底部残存率による個体数のうち、多い方と口縁部残存率とを比較してみたい（第4表）。

個体数の多い方を探った場合、須恵器は52個体で、そのうち食膳具（杯類）が16、貯蔵具が35と貯蔵具が多いことがわかる。特に壺類が多い。須恵器杯の内、底部ヘラキリの88・89・120は佐渡小泊産と考えられるが、他の杯は底部糸切りで軟質なことから北信産の可能性もある。また、壺のA・B類は底部平底で北信地方の特徴を示している。土師器個体数は114と須恵器の倍を占める。その内、食膳具の椀類が過半数である。椀の内、内黒の割合が高く74%をしめる。椀の底部は糸切りと糸切りの後ケズリを加える2種あるが、約3割がケズリを加えている。土器全体では貯蔵具22%、煮炊具28%、食膳具50%となる。貯蔵具は全て須恵器、煮炊具は全て土師器、食膳具は両者あるが土師器が81%を占める。当該期の一般的傾向と言える。

一方、口縁部残存率による比較でも類似の傾向が出ていることがわかるが、器種によっては前述の数字とかなりの違いのあるものがある。特に須恵器長頸壺の割合に大きな違いがある。長頸壺の口縁はなくなりやすいか。

遺物はそう時間幅を持たないと考えられる。須恵器では小泊産と考えられる杯がある（88・89・120）。底部麓切り、口径高さ比率0.25以下と浅く、底部から体部にかけての立ち上がりが稜を持たない等の特徴からカメ畑段階〔坂井ほか1991〕より新しいと考えられる。ほかの杯については產地が明確でないが、底部が小さく体部が大きく聞く器形は、9世紀中葉まで遡るものでない。須恵器有台杯

種別	器種		実測個体数	実測外	合計	残存率による個体数	実測個体数
土師器	壺	口縁部	161／36	225／36	386／36	11	21
	壺	口縁部	104／36	94／36	198／36	6	22
	小甕	底部	156／36	674／36	830／36	11	
	鍋	口縁部	15／36		15／36	1	4
	椀 (内黒)	口縁部	240／36	323／36	563／36	16	33
	椀	底部	839／36	765／36	1604／36	45	
須恵器	杯	口縁部	96／36	80／36	176／36	5	9
	杯	底部	149／36	458／36	607／36	17	
	有台椀	口縁部	20／36		20／36	1	5
	有台椀	底部	106／36	42／36	148／36	5	
	杯	口縁部	185／36	69／36	254／36	8	13
	杯	底部	281／36	31／36	312／36	9	
須恵器	有台杯	口縁部	4／36		4／36	1	3
	蓋	口縁部	28／36		28／36	1	1
	甕	口縁部	103／36		103／36	3	8
	甕	底部	69／36		69／36	2	23
	短頸甕	口縁部	8／36		8／36	1	2
	短頸甕	底部	18／36		18／36	1	
	楕瓶	口縁部	30／36		30／36	1	1

(45) は、形状から9世紀中

第3表 土器の実測個体数と残存率による個体数の比較

頃まで測る可能性がある。一方、食膳具の土師器の占める割合は70～80%と高い。このようなことから土器は9世紀中葉まで測るものは少なく、9世紀末を中心とした時期と言えるであろう。

須恵器の産地としては、小泊産が実測個体数で14点を数え、須恵器実測個体数全体（52点）の約26%を占めるが、ほかは産地が明確でない。頸城地方では9世紀中葉とされる大貫古窯跡3号窯、淹寺9号古窯【小田2006】およびその後とされる諏訪窯跡【高橋1990】があるが、その他の9世紀中葉以降の窯は今のところ明確でない。9世紀末段階のこれら須恵器の産地がどこなのかは、信州も含め今後検討する必要がある。

土師器では北信型の甕が大多数を占めること、内黒土師器が多いこと、須恵器では突堤付き四耳壺があること等、信州の要素が強く地理的位置からもそのことは言える。当該期の北信の状況は鳥羽【2000】によると第5表のようである。東浦遺跡では、食膳具の主体が黒色土器であることは共通する。土師器（内黒でないもの）食膳具は越後では継続的に存在するものであり、信州とはやや異なる。また、食膳具須恵器は約2割ほどあり、信州でほとんど見られなくなることと違いを見せている。越後では10世紀前半までは食膳具として存在する。

種別	器種	実測個体数・口縁部・ 底部残存率の内多い数		口縁部残存率による 個体数	
		点数	割合	点数	割合
須恵器	甕	8	0.15	3	0.18
	壺	24	0.46	2	0.12
	短頸甕	2	0.04	1	0.06
	横瓶	1	0.02	1	0.06
	杯	13	0.25	8	0.47
	有台杯	3	0.06	1	0.06
土師器	蓋	1	0.02	1	0.06
	合計	52	1.00	17	1.00
	甕	21	0.18	11	0.28
	小甕	22	0.19	6	0.15
	鍋	4	0.04	1	0.03
	内黒碗	45	0.39	16	0.40
食膳具	碗	17	0.15	5	0.13
	有台碗	5	0.04	1	0.03
	合計	114	1.00	40	1.00
	灰釉	1	1.00	0	0.00
	壺	167	1.00	57	1.00
	合計				

第4表 出土土器全体割合

9世紀前半	古代6期	食膳具における須恵器の比率が低下し、黒色土器が増加。 2～4.5期前後。須恵器杯Aの内面底径の平均は6cm未～7.5cmに集中
9世紀中葉～後半	古代7期	食膳具の主体は黒色土器になり、その比率が4.5期前後以上の段階。須恵器杯Aの内面底径の平均は5cm後～6cm前半に集中。秋賣須恵器が多くなる。黒色土器底部ヘラキリが見られる。
9世紀後半～末	古代8期	食膳具の主体は黒色土器であるが、新たに土師器の食膳具が登場し、須恵器がわずかに残る段階。黒色土器の方が、土師器より多い。底部は糸切り
10世紀前半	古代9期	食膳具の主体は、黒色土器から土師器に連転。

第5表 屋代遺跡群土器編年【鳥羽2000】

### C 遺跡の性格

長野県境の平安時代の遺跡は、近年確認されるようになったが、いずれも規模は小さい。中ノ沢遺跡では竪穴住居が3軒、土坑墓が1基確認され、関川谷地遺跡では竪穴住居2軒が確認されている。いずれも山間地で平坦部のほとんどない場所に立地する。関川谷内遺跡では、土器の在り方が北信地域と共通であり、また腰帶石鈴の出土は新潟県内では稀であるのに、北信地域ではかなりの集落で出土を見ていること等「信濃の影響を受けているとするとより、むしろ北信濃と共通の基盤上にあるものと考えるのが適當」【小池1998】とする考え方が妥当と思われる。北信地域の当該期の集落は、総じて竪穴建物が主体であり、このことも共通する。これに対して、東浦遺跡ではカマドの確認はあるものの、建物は掘立柱であるという違いを見せている。出土土器は検討結果から北信濃とその在り方が共通するものであり、やはり「共通基盤上にある」と言えるが、越後では、当該期、掘立柱建物が主流を占めることからすると東浦遺跡の在り方は越後的である。関川谷内遺跡・中ノ沢遺跡は東浦遺跡とは約2kmの距離にある。3遺跡とも土器の在り方は共通する部分が多いが、東浦遺跡では灰釉がほとんど無く、須恵器の割合が大きいこと

に違いがある。決定的な違いは、須恵器の甕を閔川谷内・中ノ沢遺跡では持っていないことである。閔川谷内遺跡では鍛冶を行っており、また腰帶石鎧も出土し、官人あるいはそれに相当する有力者が予想される【小池1998】。中ノ沢遺跡でも鍛冶関連遺物が出土している。「墨書き土器でも共通して「六」が見られ、共通する組織のもとに鍛冶作業が行われていたことを想定させる。』【小池1998】としている。

また、【坂井1996】は、古代集落の第二の画期として9世紀後半～10世紀を中心とした王朝前期をあげている。この時期は律令期の集落が衰退し、かわって新たな集落が沖積地・丘陵・山地など多様な立地を展開しているとした。丘陵・山地などは水田耕作が想定できない立地であることが多く、鍛冶遺構を伴う事例もあり、この鉄生産が沖積地開発を一方で支えたとし、山林原野の広大な開発が初めて本格的に実施された時期とした。そしてこれらの集落には、縄軸・灰軸・帶金具など一定の階層を示唆する遺物を伴うものがあり、開発の主体者には有力層が含まれているとしている。

東浦遺跡は立地が異なり、比較的平坦部に位置する。鍛冶関連遺物は全く検出されず、鍛冶は行われていなかったことが明らかである。ほぼ時期は同じであるが、同時存在したかどうかは断定できないもののこれらの遺跡は性格を異にして有機的に関連していたと思われる。貯蔵具の比率の極端に低い山間の閔川谷内遺跡・中ノ沢遺跡と東浦遺跡の違いは何を意味するであろうか。須恵器甕は貯蔵用であり、【宇野1991】によれば、印戸（須恵器甕）は、漬菜・醤類を貯蔵したものとしている。内容物の確定は別として、年間を通して長期貯蔵用と考えられる。のことからすれば、須恵器甕を持たない閔川谷内・中ノ沢遺跡等は生活の根拠地ではなく、生産活動等にかかる居住地であったと考えられないであろうか。

東浦遺跡は、集落区分【春日1995】では、D類（1～3棟程度の掘立柱建物ないしは竪穴住居によって構成される建物小群が散在する集落。井戸・倉庫は基本的に持たない。建物小群の間隔が広く、そこが畑地として利用された場合がある）。にあたると考えられるが、建物を除いて施設を全く伴っていない。畑の存在は明確でない。

建物規模は大きくないが、調査区外に続く溝の岸にはほかにも建物が予想される。当該地点は信濃と越後とを結ぶ主要交通路の一つと考えられ、陸路のほか、水路も利用されていたことが考えられる。竪穴住居が主体を占めるこの付近での掘立柱建物の存在、須恵器甕・壺といった貯蔵具が遺跡規模の割に多いこと等は、遺跡の性格を反映したものと考えられるが、どのようなものであったであろうか。

## 要 約

- 1 東浦遺跡は新潟県妙高市（旧妙高高原町）毛祝坂字東浦31ほかに所在する。妙高山東麓、関川左岸の標高約535mにある。
- 2 発掘調査は一般国道18号妙高野尻バイパス建設に伴うものである。確認調査は平成3年度・本発掘調査は平成4年度に実施した。調査対象面積17,500m<sup>2</sup>のうち、本調査面積は延6,830m<sup>2</sup>である。
- 3 調査の結果、上層から平安時代の遺構・遺物が、下層から縄文時代前期の遺物が出土した。
- 4 平安時代の遺構には掘立柱建物1基以上、カマド1基、土坑4基、ビット等がある。遺物では須恵器壺・壺・横瓶・杯・有台杯等が、土器類・小壺・鍋・椀等がある。多くは溝（旧河道）からの出土である。土器類の大部分が信州系で、およそ9世紀末葉を中心とした時代と考えられる。
- 5 縄文前期の土器は、胎土に纖維を含む前～中葉の深鉢である。また、磨製石斧も1点出土した。遺構は確認されていない。

## 引用・参考文献

- 飯坂盛泰・島田昌幸ほか 2000 『上信越自動車道関係発掘調査報告書VI 上中島遺跡・野林遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 宇野隆夫 1991 『律令社会の考古学的研究』桂書房
- 宇野隆夫 1992 『食器計量の意義と方法』『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集 国立歴史民俗博物館
- 小田由美子 1993 『東浦遺跡』『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成4年度 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小田由美子 2006 『淹古窯跡群 大貫古窯跡群』 新潟県教育委員会(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 1995 『古代集落の展開－越後を事例として－』『研究紀要』 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実・北野博司・笠澤正史・高橋勉 2003 『第5章 古代 第2節 遺跡と遺物』『上越市史資料編2 考古』新潟県上越市
- 春日真実 2005 『越後における奈良・平安時代土器編年の対応関係について－「今池編年」「下ノ西編年」「山三賀編年」の検討を中心に－』『新潟考古』第16号 新潟県考古学会
- 桑原紀昭 2003 『第四章 近世 第四節 交通と運輸』『板倉町史 自然・通史編』 新潟県板倉町
- 小池義人・江口志麻 1998 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第90集 関川谷内遺跡I』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小池義人 1998 『第VI章まとめ 2古代平安期』『新潟県埋蔵文化財調査報告書第90集 関川谷内遺跡I』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小島正巳 1991 『妙高山麓採集の押型文土器－松ヶ峰No.202・208遺跡ほか(17遺跡)－』『新潟県考古学講話会報 第7号』 新潟考古学講話会
- 小島正巳 1993 『妙高松ヶ峰No.237遺跡の縄文早期土器』『新潟考古』第4号 新潟県考古学会
- 齊藤 準 2006 『新潟県における縄文前期前葉の土器群について－布目式からそれ以後の土器群－』『第19回 縄文セミナー 縄文前期前葉の再検討』 縄文セミナーの会
- 坂井秀弥・鶴間正昭・春日真実 1991 『佐渡の須恵器』『新潟考古』第2号 新潟県考古学会
- 坂井秀弥 1993 『長野県飯山市の平安期佐渡産須恵器・越後系土器』『北陸古代土器研究』第3号 北陸古代

### 土器研究会

- 坂井秀弥 1996 「律令以後の古代集落」『歴史学研究』第681号 歴史学研究会
- 笛澤 浩 1988 「古代の土器」『長野県史』考古資料編 遺構・遺物
- 笛澤正史 1995 「信・越地域にまたがるロクロ土師器窯の在り方について」『新潟考古学談話会会報』第15号 新潟考古学談話会
- 笛澤正史 2003 「第5章 古代 第1節 時代概説」『上越市史資料編2 考古』 新潟県上越市史編さん委員会
- 高橋 勉 1985 『昭和59年度 新井市遺跡確認調査報告書—上百々遺跡・高柳宮ノ本遺跡—』 新潟県新井市教育委員会
- 高橋 勉 1989 『杉明遺跡』 新潟県新井市教育委員会
- 高橋 勉 1990 『平成2年度新井市遺跡確認調査報告書 漢訪室跡・松山B遺跡・坪ノ内遺跡』 新潟県新井市教育委員会
- 高橋 勉 1993 『平成4年度新井市遺跡確認調査報告書』 新潟県新井市教育委員会
- 高橋 勉 1995 『平成6年度新井市遺跡確認調査報告書』 新潟県新井市教育委員会
- 高橋 勉 1996 『平成7年度新井市遺跡確認調査報告書』 新潟県新井市教育委員会
- 高橋 勉 2000 「第III章 弥生～室町時代の遺物2 奈良～室町時代の遺物」『龍峰遺跡発掘調査報告書遺物編』 新潟県中郷村教育委員会
- 立木(土師)由理子・寺崎裕助はか 1996 『一般国道18号妙高野尻ハイバス関係発掘調査報告書Ⅰ大堀遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 立木(土師)由理子・寺崎裕助はか 1997 『一般国道18号妙高野尻ハイバス関係発掘調査報告書Ⅱ中ノ沢遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 立木(土師)由理子・寺崎裕助 1997 『上新ハイバス関係発掘調査報告書Ⅲ萩清水遺跡・三本木新田B遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 立木(土師)由理子・寺崎裕助 1999 『上新ハイバス関係発掘調査報告書Ⅳ郷清水遺跡・西福田新田遺跡・対煙B遺跡ほか』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 寺崎裕助 1997 「第II章3 新潟県内の縄文時代前期中葉・後葉の遺跡分布」『上新ハイバス関係発掘調査報告書Ⅲ萩清水遺跡・三本木新田B遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 寺崎裕助 1999 『新潟県における縄文時代前期の土器—その標識資料と編年一』『縄文土器論集』六一書房
- 島羽英継はか 1999 『更埴条里遺跡・星代遺跡群—古代1編 本文』(財)長野県文化振興事業団・長野県埋蔵文化財センター
- 島羽英継はか 2000 『更埴条里遺跡・星代遺跡群—総論編』(財)長野県文化振興事業団・長野県埋蔵文化財センター
- 島羽英継はか 2001 『南宮遺跡II』 長野県長野市教育委員会
- 早津賛二・古川成光 1981 「妙高火山赤倉火砕流堆積物と田口泥流堆積物の14C年代」『第四紀研究』20 日本国四紀学会
- 早津賛二・小島正巳 1985 「火山噴出物と先史時代遺物包含層との層位関係」『妙高火山群—その地質と活動史一』 第一法規
- 早津賛二 1994 「妙高火山群研究の1993年における新展開と問題点」『妙高火山研究所年報』第2号 妙高火山研究所
- 室岡 博・本間信昭 1976 『兼保遺跡 新潟県中頸城郡妙高高原町兼保遺跡発掘調査報告書』 新潟県妙高高原町教育委員会

遺物觀察表 (1)

別表 別物動植物表 (2)

場所	種名	タリック	倒位	LIF	高さ	直径	高さ/ 直径	全体高 /LIF	全体高 /cm	同一場所生息地点		種別	分類	測定 方法	測定、支持等
										(cm)	(cm)				
31 溝渠地点 165	V			29.0	62.2	55.5	9/10	25/36	1K1V, 1K2V, 1K3V, 14V, 14.6	直立	A	14種群ヨコナフ、外因性干渉、内因性干渉、F型平行線、(手前)	直立	直立	
32 溝渠地点 14111	V								OK25B, OK25V, 1K1V, 1K2V, 1K3V, 14V, 14.6	直立	A	14種群ヨコナフ、外因性干渉、内因性干渉、F型平行線、(手前)	直立	直立	
33 溝渠地点 206	V								OK25B, 1K1V, 1K2V, 1K3V, 13V, 13.1	直立	A	14種群ヨコナフ、外因性干渉、内因性干渉、F型平行線、(手前)	直立	直立	
34 溝渠地点 0810	V								OK25B, 1K1V, 1K2V, 1K3V, 14V, 14.6	直立	A	14種群ヨコナフ、外因性干渉、内因性干渉、F型平行線、(手前)	直立	直立	
35 溝渠地点 5011	V								OK25B, 1K1V, 1K2V, 1K3V, 14V, 14.6	直立	A	14種群ヨコナフ、外因性干渉、内因性干渉、F型平行線、(手前)	直立	直立	
36 溝渠地点 410	V								OK25B, 1K1V, 1K2V, 1K3V, 14V, 14.6	直立	A	14種群ヨコナフ、外因性干渉、内因性干渉、F型平行線、(手前)	直立	直立	
37 溝渠地点 2077	III								OK25B, 1K1V, 1K2V, 1K3V, 14V, 14.6	直立	A	14種群ヨコナフ、外因性干渉、内因性干渉、F型平行線、(手前)	直立	直立	
38 溝渠地点 0826	V								OK25B, 1K1V, 1K2V, 1K3V, 14V, 14.6	直立	A	14種群ヨコナフ、外因性干渉、内因性干渉、F型平行線、(手前)	直立	直立	
39 溝渠地点 2524	II								OK25B, 1K1V, 1K2V, 1K3V, 14V, 14.6	直立	A	14種群ヨコナフ、外因性干渉、内因性干渉、F型平行線、(手前)	直立	直立	
40 溝渠地点 2066	V								OK25B, 1K1V, 1K2V, 1K3V, 14V, 14.6	直立	A	14種群ヨコナフ、外因性干渉、内因性干渉、F型平行線、(手前)	直立	直立	
41 溝渠地点 2017	III								OK25B, 1K1V, 1K2V, 1K3V, 14V, 14.6	直立	A	14種群ヨコナフ、外因性干渉、内因性干渉、F型平行線、(手前)	直立	直立	
42 溝渠地点 20122	V								OK25B, 1K1V, 1K2V, 1K3V, 14V, 14.6	直立	A	14種群ヨコナフ、外因性干渉、内因性干渉、F型平行線、(手前)	直立	直立	
43 溝渠地点 1999	V								OK25B, 1K1V, 1K2V, 1K3V, 14V, 14.6	直立	A	14種群ヨコナフ、外因性干渉、内因性干渉、F型平行線、(手前)	直立	直立	
44 溝渠地点 2066	V								OK25B, 1K1V, 1K2V, 1K3V, 14V, 14.6	直立	A	14種群ヨコナフ、外因性干渉、内因性干渉、F型平行線、(手前)	直立	直立	
45 溝渠地点 2017	V								OK25B, 1K1V, 1K2V, 1K3V, 14V, 14.6	直立	A	14種群ヨコナフ、外因性干渉、内因性干渉、F型平行線、(手前)	直立	直立	
46 溝渠地点 301	III								OK25B, 1K1V, 1K2V, 1K3V, 14V, 14.6	直立	A	14種群ヨコナフ、外因性干渉、内因性干渉、F型平行線、(手前)	直立	直立	
47 溝渠地点 3021	V								OK25B, 1K1V, 1K2V, 1K3V, 14V, 14.6	直立	A	14種群ヨコナフ、外因性干渉、内因性干渉、F型平行線、(手前)	直立	直立	
48 溝渠地点 2017	III								OK25B, 1K1V, 1K2V, 1K3V, 14V, 14.6	直立	A	14種群ヨコナフ、外因性干渉、内因性干渉、F型平行線、(手前)	直立	直立	

## 別表 遺物財産表(3)

発行年 (SD4.11P)	遺失地點	ダーツ	部位	L(H) (cm)	高さ (cm)	幅 (cm)	幅× 高さ/ 全体幅 (%)	高さ/ 全体幅 (%)	高さ/ 底面高 (%)	同一物体生土地点	種別		分類	測量・支柱等	色	調査
											上端部	下端部				
49	満塗地點	IV		26.6		4.36	20.3%	2.36	20.3%				B	ヨコナ	相	
50	満塗地點	195	IV	15.4		2.10	10.36				上端部	縫	H	ヨコナ	相	なし
51	満塗地點	36222	III	14.0		2.10	10.36				上端部	縫	A	ヨコナ	相	なし
52	満塗地點	397	IV	14.4		2.10	10.36				上端部	縫	A	ヨコナ	相	なし
53	満塗地點	276	III	14.8		2.10	10.36				上端部	縫	A	ヨコナ	相	なし
54	満塗地點	36222	II	12.8		2.10	10.36				上端部	縫	A	ヨコナ	相	なし
55	満塗地點	297	III	13.0		2.10	10.36				上端部	縫	B	ヨコナ	相	なし
56	満塗地點	3017	N	11.0		2.10	10.36				上端部	縫	B	ヨコナ	相	なし
57	満塗地點	292	IV	7.6		2.10	10.36				上端部	縫	B	ヨコナ	相	なし
58	満塗地點			5.4		2.10	10.36				上端部	縫	B	ヨコナ	相	なし
59	満塗地點	2017	II	5.0		4.10	26.36	36.36*	36.36*		上端部	縫	A	ヨコナ	相	なし
60	満塗地點	IN24	IV	6.6		2.10	10.36				上端部	縫	B	ヨコナ	相	なし
61	満塗地點	3006	IV	34.0		9.36	27.36	10.0%	30.11%	2015V	上端部	縫	B	ヨコナ	相	なし
62	満塗地點	1015	III	30.4	5.9	0.36	2.36	27.36	10.0%		上端部	縫	B	ヨコナ	相	なし
63	満塗地點	372	IV	15.4	5.0	7.0	6.34	8.10	11.36	21.36	397III	上端部	縫	C1a	内調	なし
64	満塗地點	36222	IV	14.6	5.0	7.0	6.38	8.10	11.36	21.36	2720 II	上端部	縫	C1a	内調	なし
65	満塗地點	296	IV	14.4	5.4	6.8	6.38	5.10	15.36	36.36		上端部	縫	C1a	内調	なし
66	満塗地點	296	IV	14.4	5.3	6.8	0.37	2.36	14.26	36.36		上端部	縫	C1b	内調	なし
67	満塗地點	1065	III	13.0	4.4	6.2	0.34	6.36	5.36		上端部	縫	D1a	内調	なし	なし
68	満塗地點	1021	IV	13.5	4.8	5.6	0.36	5.10	7.36	36.36		D1b	内調	D1b	内調	なし
69	満塗地點	392	III	12.6		0.00	13.00				上端部	縫	E1	内調	なし	なし
70	満塗地點	2912	III	7.0		2.10	10.36				上端部	縫	F1a	内調	なし	なし
71	満塗地點	276	III	7.0		2.10	10.36				上端部	縫	F1b	内調	なし	なし
72	満塗地點	2017	N	6.0		3.10	36.36				上端部	縫	G1	内調	なし	なし
73	満塗地點			6.4		2.10	36.36				上端部	縫	H1	内調	なし	なし
74	満塗地點	2021	V	6.8			36.36				上端部	縫	I1	内調	なし	なし
75	満塗地點	3017	III	6.0			13.36				上端部	縫	J1	内調	なし	なし
76	満塗地點	195	IV	5.4		1.10	29.36				上端部	縫	K1	内調	なし	なし
77	満塗地點	IN23	N	6.0		0.43	8.10	20.36	35.36		上端部	縫	L1	内調	なし	なし
78	満塗地點	3621	IV	12.3	5.3	6.2	0.43	8.10	20.36	35.36	1821 II	上端部	M1	内調	なし	なし
79	満塗地點	291	IV	7.8		2.10	10.36	33.36	34.36	1116 I	上端部	N1	内調	なし	なし	
80	満塗地點	045	IV	15.4			11.36	042310	042310	1K1 V	上端部	O1	内調	なし	なし	
81	満塗地點	0425		18.4			21.36				上端部	縫	P1	ヨコナ	相	なし
82	満塗地點	018	III			8.9	5.10				上端部	縫	Q1	ヨコナ	相	なし
83	満塗地點	018	V			5.4	6.10				上端部	縫	R1	ヨコナ	相	なし

遺物觀察表 (4)

別表 別物貿易表(5)

通商年	タリード	部位	LIF	高さ	幅	奥行き	合体操作(機械部品)	同一部生地点	種別	部位	分類	測定・支拂等	也 説	
118 満足地點 11AV			34.2				4/36	0/30/N, 11AV, 11AV/V, 115V,	頭部部	A	ヨコナラ	ヨコナラ、斜面の輪郭	灰	
119 満足地點 0925	II	9.0	27.7				20/36	11KV, 1831N, 0110V, 0115V, 0130V	頭部部	A	ヨコナラ	頭部部	灰	
120 満足地點 116	V	13.0	3.3	7.6	0.25	7/10	19/36	11KV, 1111V, 1111V, 11AV	頭部部	B	ヨコナラ	頭部部 [ヨコナラ]	灰	
121 満足地點 0120	V	19.2					16/36	11KV, 1117V, 1111V	頭部部	C	ヨコナラ	ヘリ切口、(小口)	灰	
122 満足地點 1111	V	13.0					1/10	3/36	11KV, 1111V	頭部部	D	ヨコナラ	外側曲入	黒
123 満足地點 1166	V	14.4					1/10	3/36	11KV, 1111V	頭部部	E	ヨコナラ	外側曲入	黒
124 満足地點 1111	V	13.0					10/30	1111V	頭部部	F	ヨコナラ	外側曲入	灰	
125 満足地點 1K11	V	12.8					1/10	4/36	11KV, 1111V	頭部部	G	ヨコナラ	外側曲入、外側ナラ	灰
126 満足地點 1111	V	37.6					3/36	11KV, 1111V	頭部部	H	ヨコナラ	外側曲入	灰	
127 (S12)	I						3/36	0L15V*, 1811V, 112V, 11.6V*, 11.1V	頭部部	I	ヨコナラ	体部ケズリ	明るめ	
128 満足地點 1116	V	14.0	4.2	5.9	0.30		6/36	11KV, 1K16V*, 11.1V, 11.6V*, 1K11	頭部部	J	上半部ヨコナラ、下半部ケツリ	明るめ	灰	
129 満足地點 1116	V	14.0	4.2	5.9	0.30		6/36	11KV, 1K16V*, 11.1V, 11.6V*, 1K11	頭部部	K	ヨコナラ (外側、系留)	明るめ	灰	
130 満足地點 0105	III	12.2					8/36	11KV, 1111V	頭部部	L	ヨコナラ	系留	灰	
131 満足地點 01067	V	5.6					36/36	11KV, 1111V	頭部部	M	ヨコナラ	系留	灰	
132 満足地點 1111	V	5.9					25/36	00023W, 2991III, 2P22III	頭部部	N	ヨコナラ	系留	灰	
133 19×1-棒生地點		32.3					15/36	13.8-L-II	頭部部	O	ヨコナラ	系留	灰	
134 19×1-棒生地點		11.0							頭部部	P	ヨコナラ	系留	灰	
135 2720	II	1.29	3.8	5.6	0.29	7/10	24/36	26/36	頭部部	Q	ヨコナラ	系留	灰	
136 1216	II	1.30					0/36		頭部部	R	ヨコナラ	系留	灰	
137 1216	II	1.30					4/36		頭部部	S	ヨコナラ	系留	灰	
138 19×1-棒生地點		10.0					11/36		頭部部	T	ヨコナラ	系留	灰	
139 2015	II	22.0					3/36		頭部部	U	ヨコナラ	系留	灰	
140 2015	III	22.9					5/36		頭部部	V	ヨコナラ	系留	灰	
141 1043	II	28.6					4/36		頭部部	W	ヨコナラ	系留	明るめ	
142 19×1-棒生地點	II	11.0	5.5	5.0	0.37	8/10	10/36	35/36	頭部部	X	ヨコナラ	下部ヨコナラアリ、輪郭 [大]	明るめ	
143 19×1-棒生地點		15.0	5.5	5.0	0.37	8/10	12/36	35/36	頭部部	Y	ヨコナラ	下部ヨコナラアリ、輪郭 [大]	明るめ	
144 6M		12.4	3.0	6.0	0.24		7/36	13/36	頭部部	Z	ヨコナラ	系留	明るめ	
145 2520	II	6.5					10/36		頭部部	AA	ヨコナラ	内側	明るめ	
146 6M		5.9					5/36		頭部部	AB	ヨコナラ	内側	明るめ	
147 2K24	II	4.2					36/36		頭部部	AC	ヨコナラ	内側	明るめ	
148 3M		5.6	2.3	0.6					頭部部	AD	ヨコナラ	内側	明るめ	
149 23.1-棒生地點		5.0	2.3	1.1					頭部部	AE	ヨコナラ	内側	明るめ	
150 90	I	7.8							頭部部	AF	ヨコナラ	内側	明るめ	
151 90	III	7.8							頭部部	AG	ヨコナラ	内側	明るめ	
152 SD3	79±	6.2	2.5	0.6					頭部部	AH	ヨコナラ	内側	明るめ	
153a	201	6.0	2.0	0.6					頭部部	AI	ヨコナラ	内側	明るめ	
		6.0	2.0	0.6					頭部部	AJ	ヨコナラ	内側	明るめ	
		6.0	2.0	0.6					頭部部	AK	ヨコナラ	内側	明るめ	
		6.0	2.0	0.6					頭部部	AL	ヨコナラ	内側	明るめ	
		6.0	2.0	0.6					頭部部	AM	ヨコナラ	内側	明るめ	
		6.0	2.0	0.6					頭部部	AN	ヨコナラ	内側	明るめ	
		6.0	2.0	0.6					頭部部	AO	ヨコナラ	内側	明るめ	
		6.0	2.0	0.6					頭部部	AP	ヨコナラ	内側	明るめ	
		6.0	2.0	0.6					頭部部	AQ	ヨコナラ	内側	明るめ	

別表 遺物點算表(6)

遺物名	グリット	割位	L1#F (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	底丈 (cm)	底面積 × 底面積 (cm) <sup>2</sup>	全体底面 × 底面積 (cm) <sup>2</sup>	底面積 (cm) <sup>2</sup>	同一場所生土地点	種別	品種	分類	測量・支柱等	色 調
153c 6#H	2956										調文土器			—	
153d											調文土器			7月17日作成	
153e		手明									調文土器			2月手形手印	
154	カラマニ4										調文土器			内側に丸輪	黒
155	3C21	II									調文土器			丸輪	黒
156	91-L	地酒上									調文土器			丸輪	黒
157	2P19-24		32.3	6.6	6.10	29/36	7/36	2P2569面、2P18火炒面下			調文土器			1種小突起1個、調文LR、BL、火炒、内側面 1種孔	黒
158	2P19-24	火炒面下	19.0	23.6	4/10	14/36					調文土器			火炒面	黒
159	2P18	火炒面下	23.6	3/10	19/36			1Q148火炒F、2P17、2P19-24			調文土器			火炒面	黒
160	2N	火炒面下									調文土器			火炒面	黒
161	2N16	火炒面下									調文土器			火炒面、火炙燒、縫合切	
162	2N16	火炒面下									調文土器			火炒面	
163	2N21										調文土器			火炒面、縫合切	
164	2N16										調文土器			火炒面、縫合切	
165	2M	火炒面下									調文土器			火炒面	
166	2M	火炒面下									調文土器			火炒面	
167	2N21										調文土器			火炒面、縫合切	
168	0R15		13.5 (mm)	6.2 (mm)	2.4 (mm)						調文土器			火炒面	

図 版

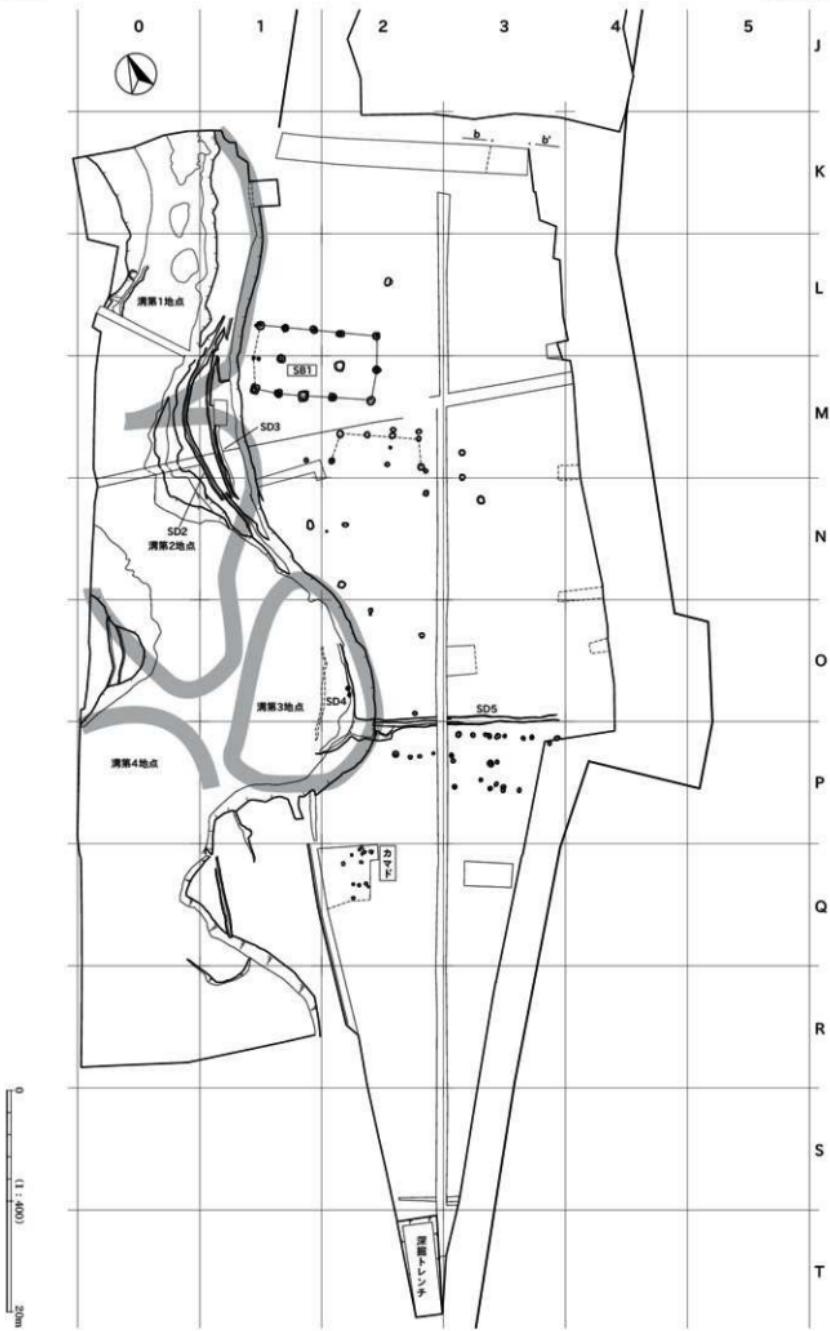
遺構全体図（1）

図版 1



圖 版 2

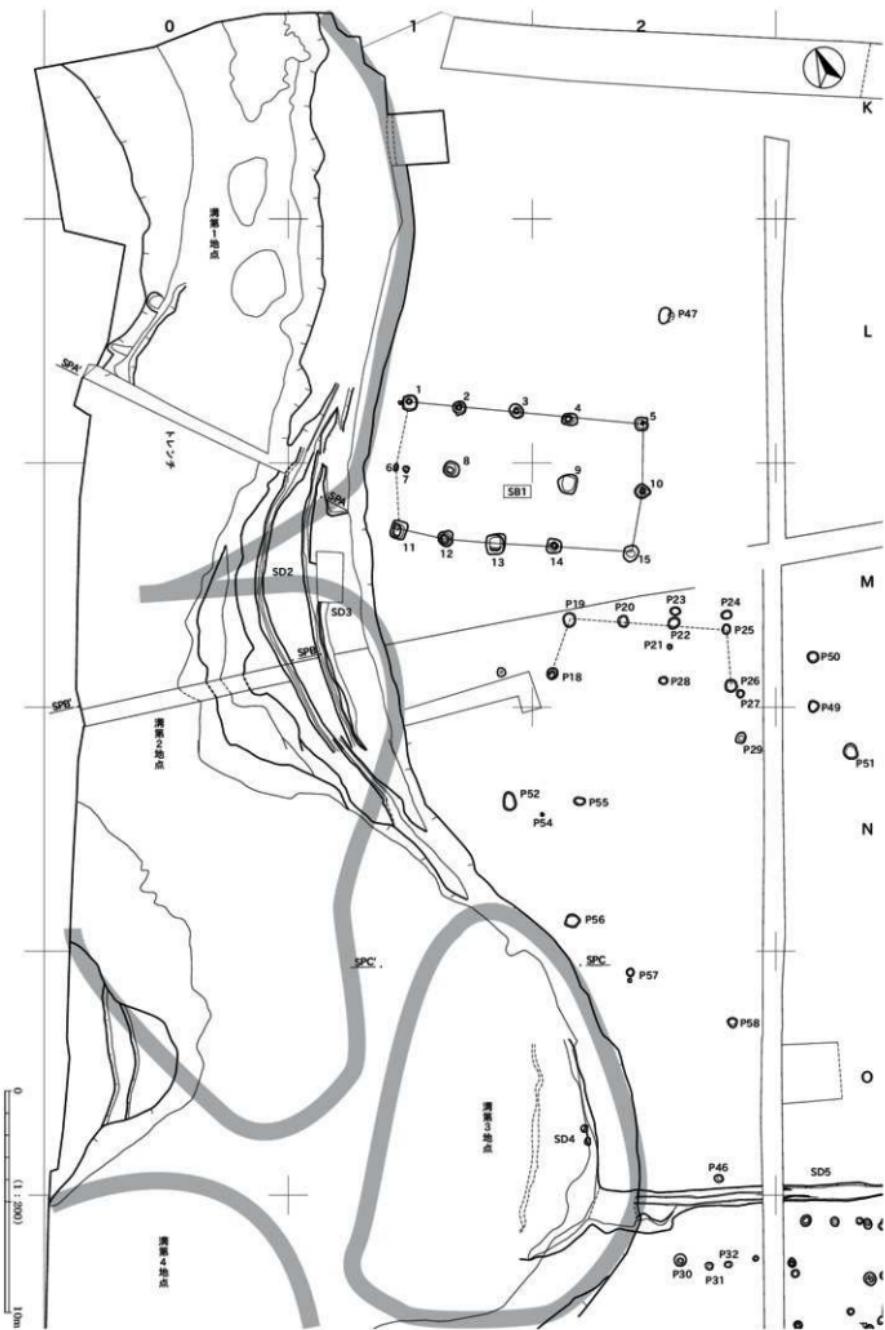
### 遺構全体図（2）



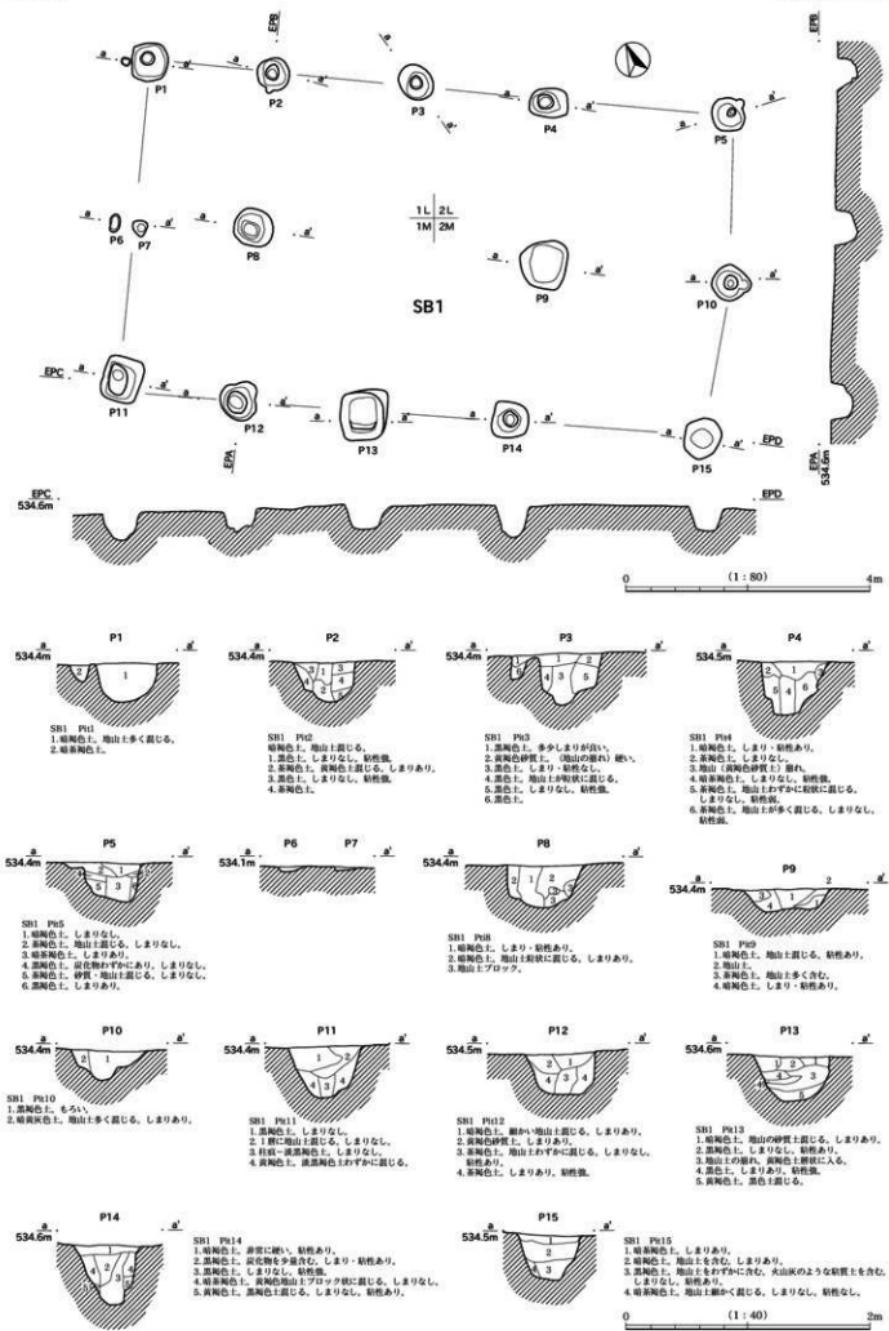
### 遺構分割図（1）

### 圖 版 3

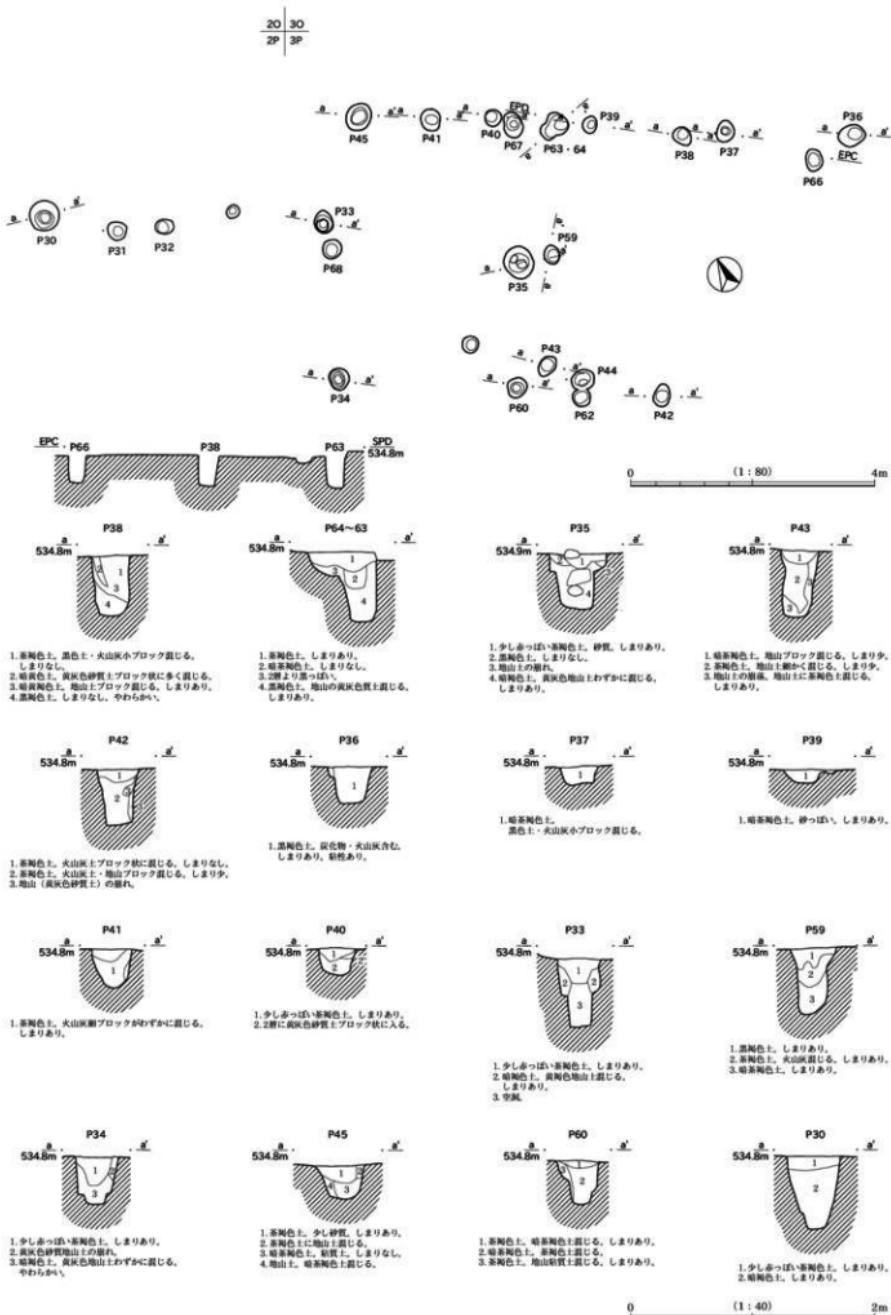








遺構個別図 (2)



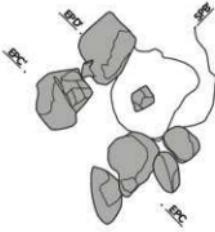
カマド平面図



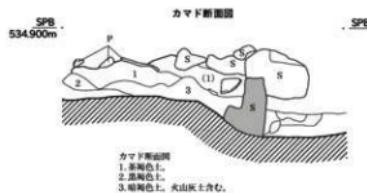
SPE.

.SPE

SPA.

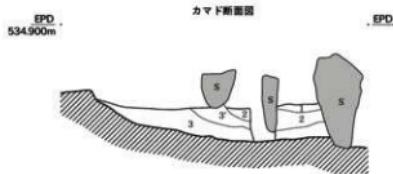


202 | 203  
207 | 208

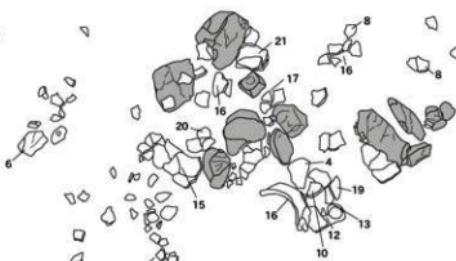


0 (1 : 20) 1m

■ 石



カマド付近土器出土状況



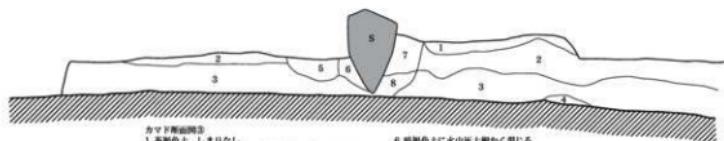
数字は報告土器No..

2Q1 | 2Q2  
2Q6 | 2Q7

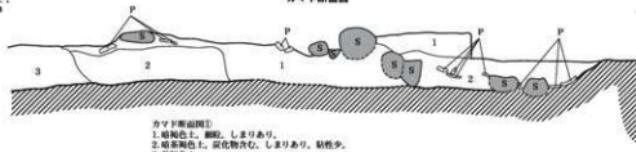
2Q2 | 2Q3  
2Q7 | 2Q8

SPE  
534.9m

## カマド断面図

SPA  
534.9m

## カマド断面図



SK3



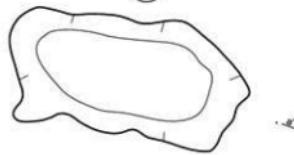
SK3

B-B'

A-A'



SK5



SK4



533.6m



533.6m

SK4 1. 黑褐色土。暗褐色土少混じる。しまり少。

- SK3  
 1. 黑褐色土。  
 2. 黑褐色土。(地山灰を含む)  
 3. 黑褐色土。  
 4. 黄褐色土。  
 5. 地山ブロック。

SD1

57.5m

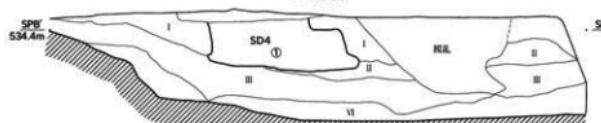


SD1 1. 黑褐色土。木の根多い。しまりなし。

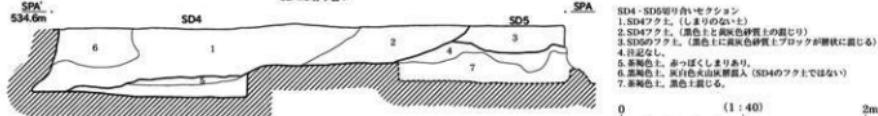
SD4断面図

(1. 黑褐色土に混褐色土。黄褐色火成灰が混じる。)

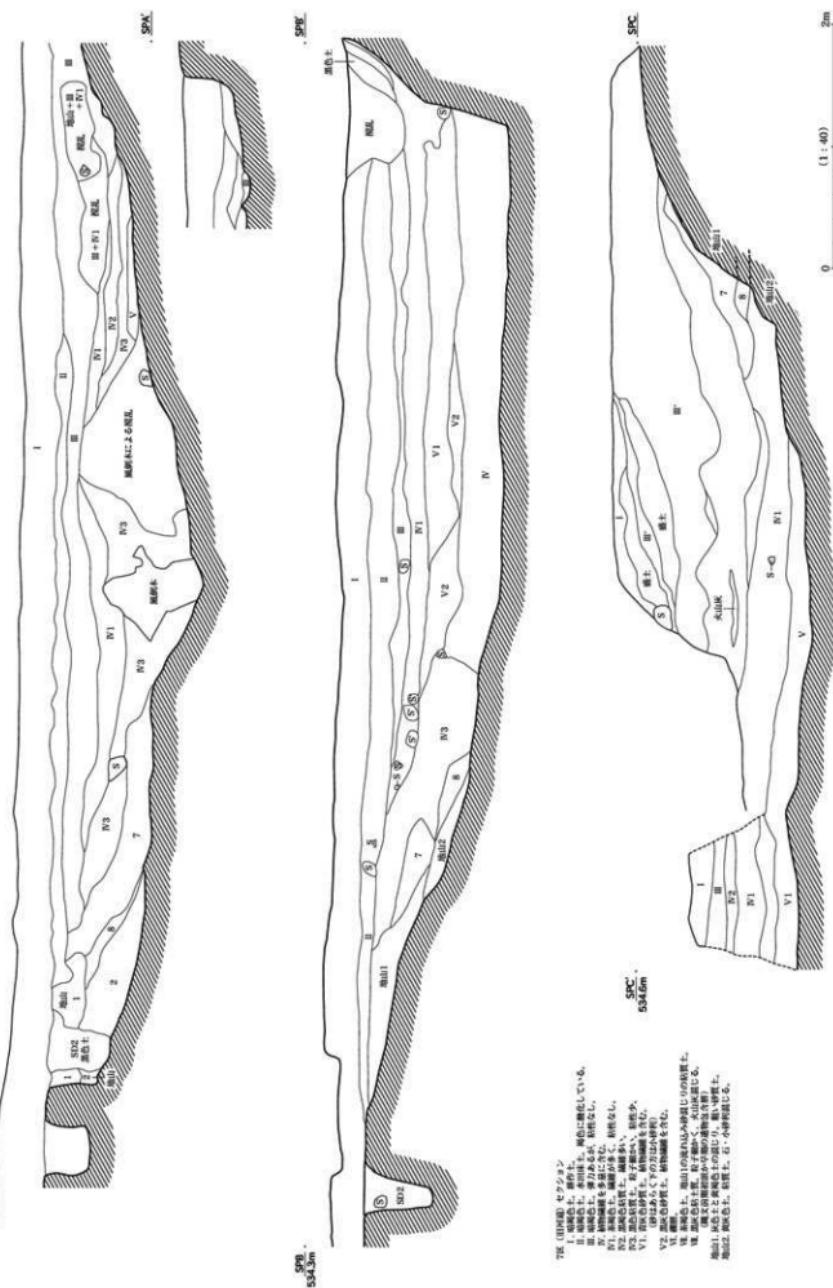
## SD4断面図

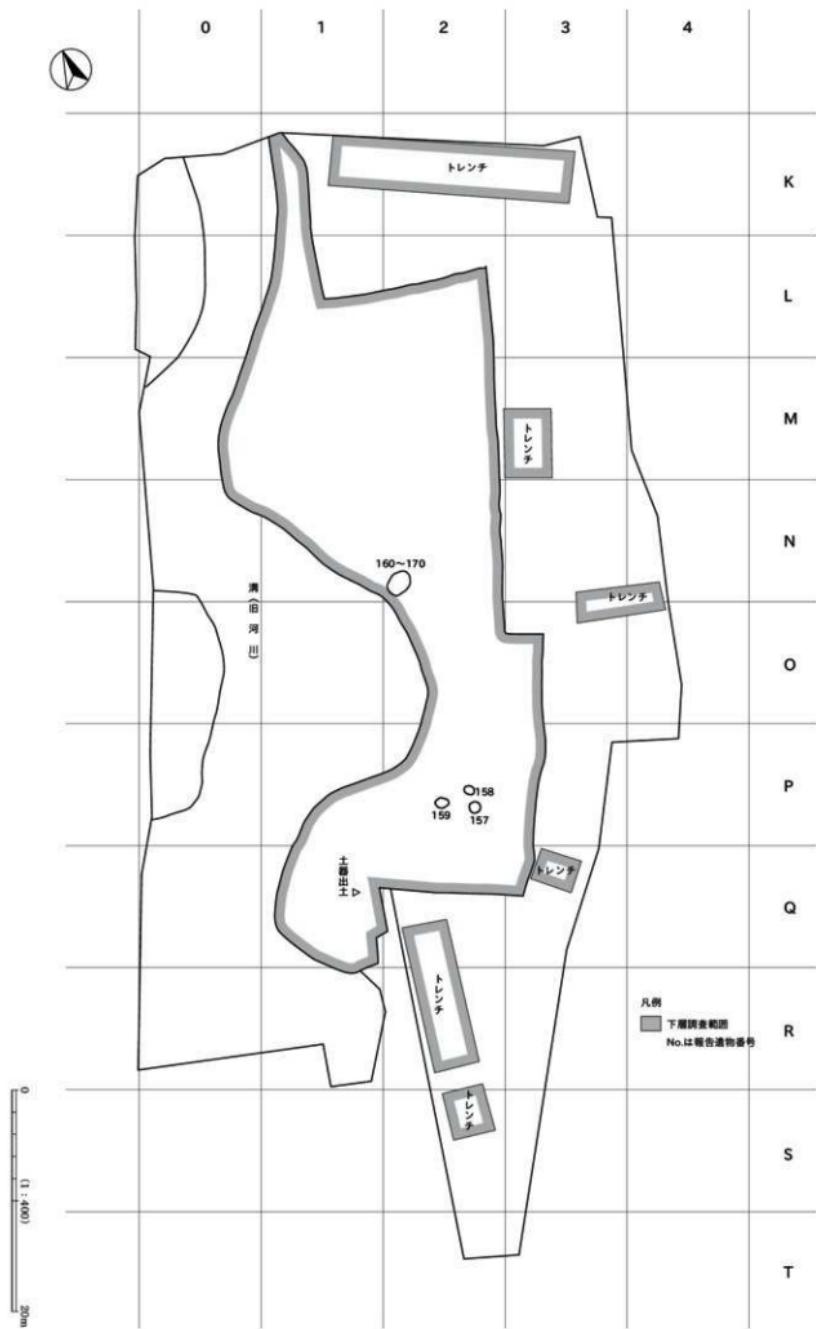
SPA'  
534.6m

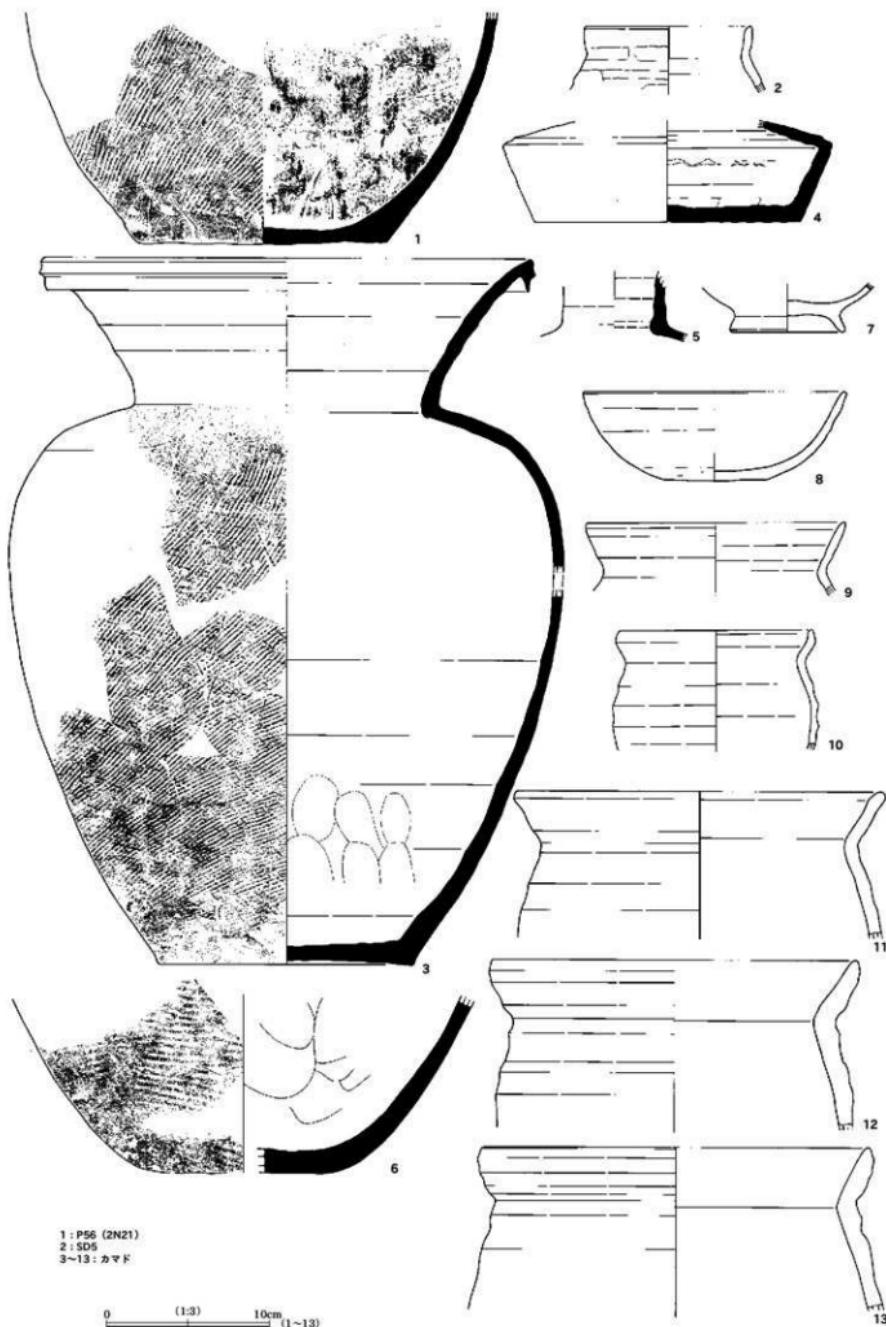
## SD4.5切り合い

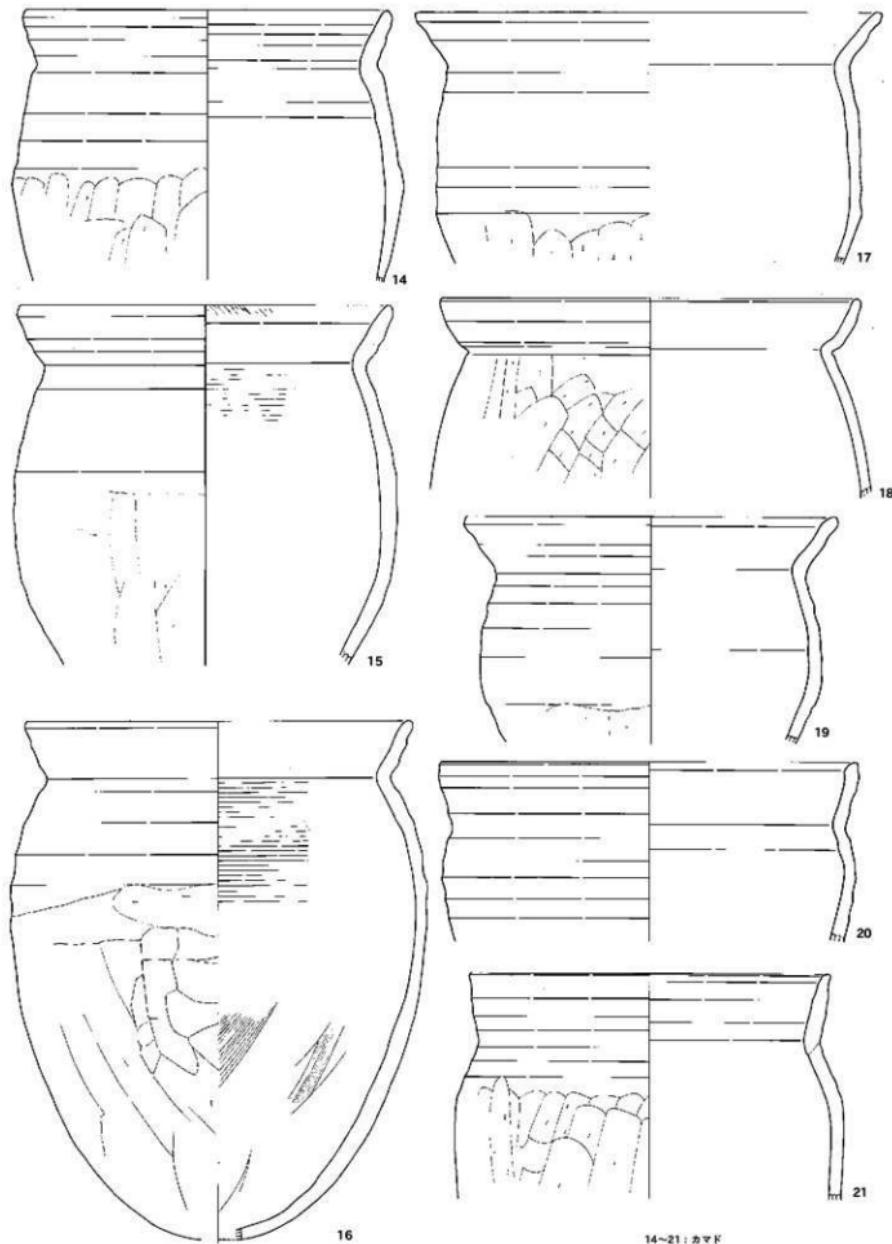


第(5)河段セクション図



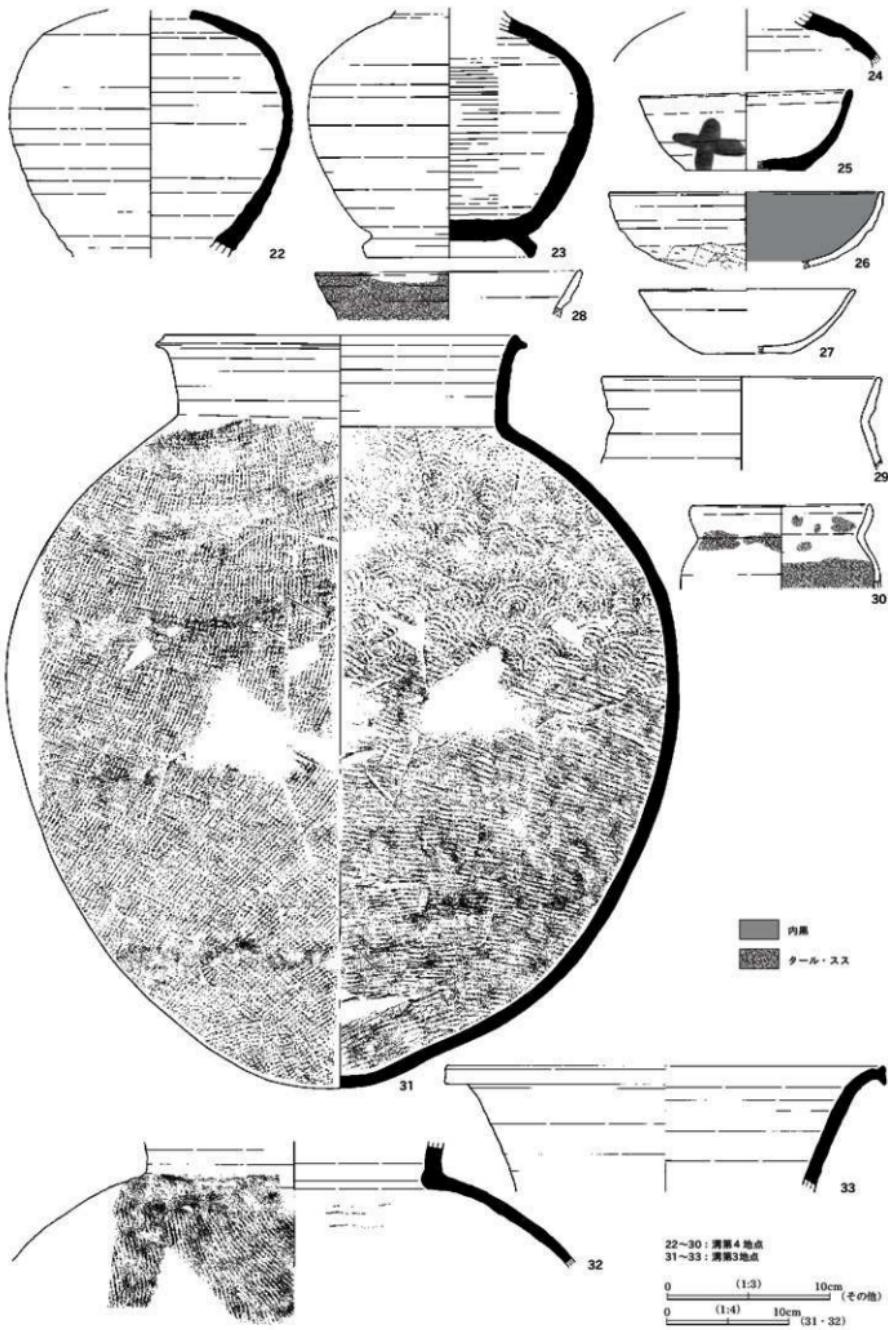


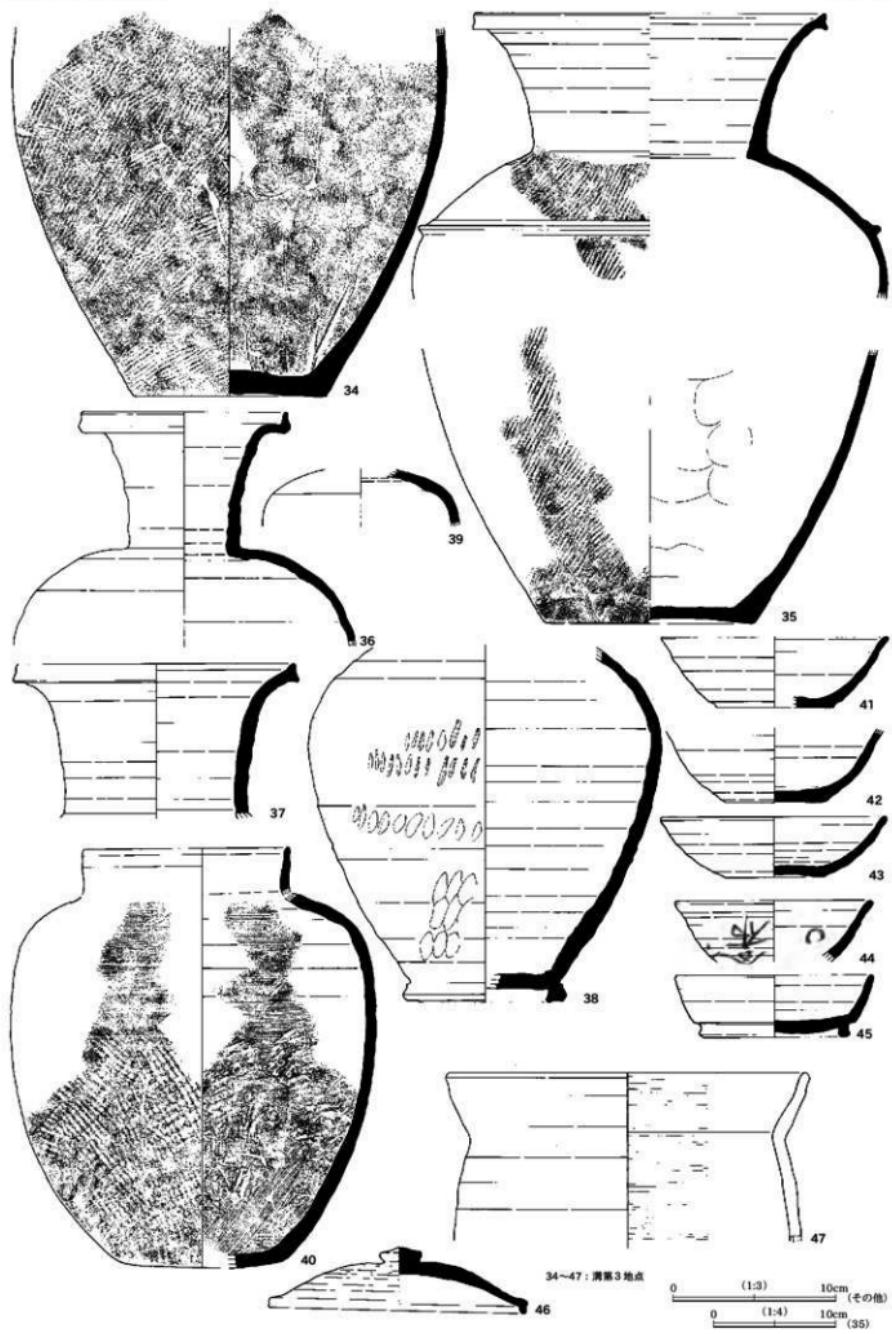


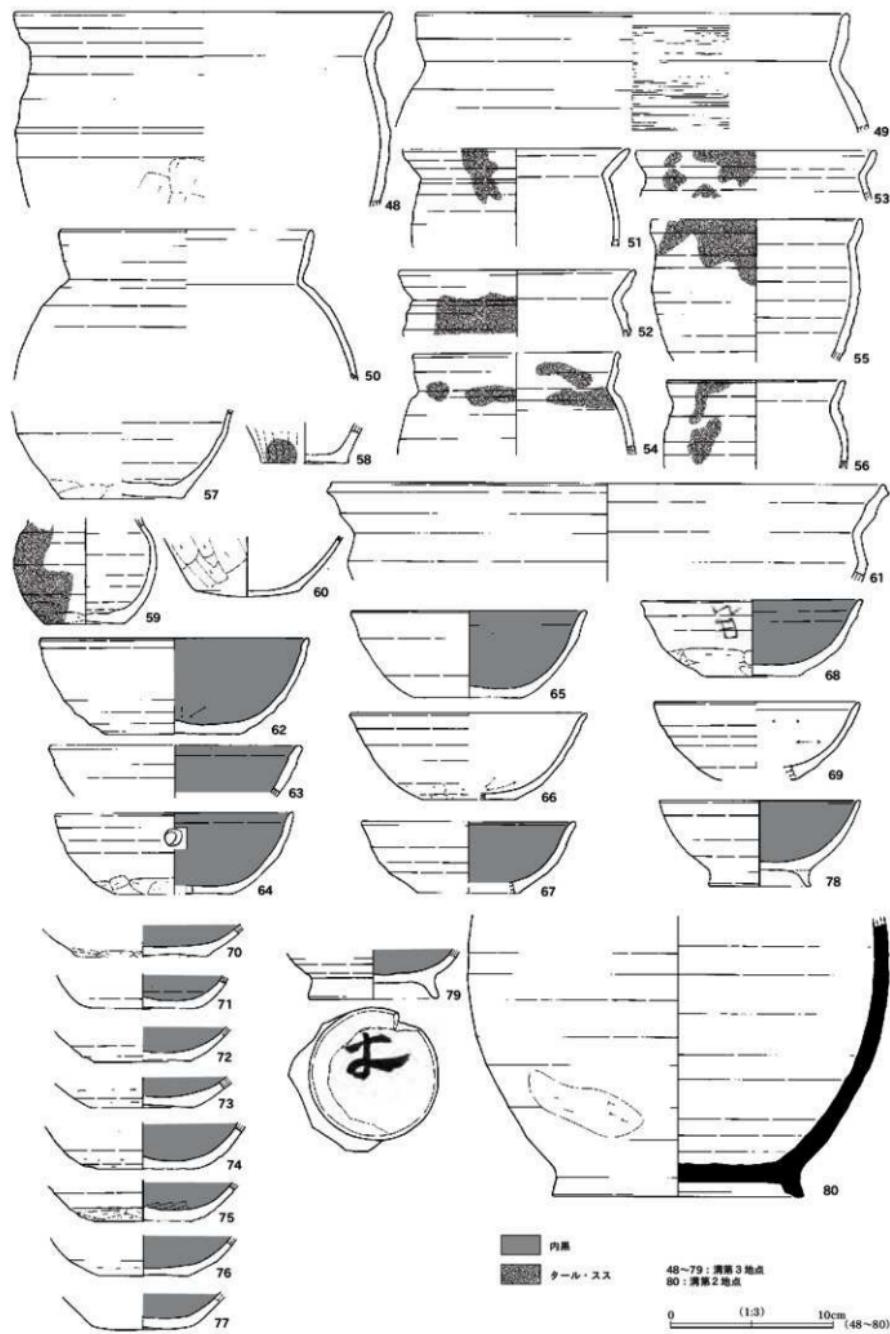


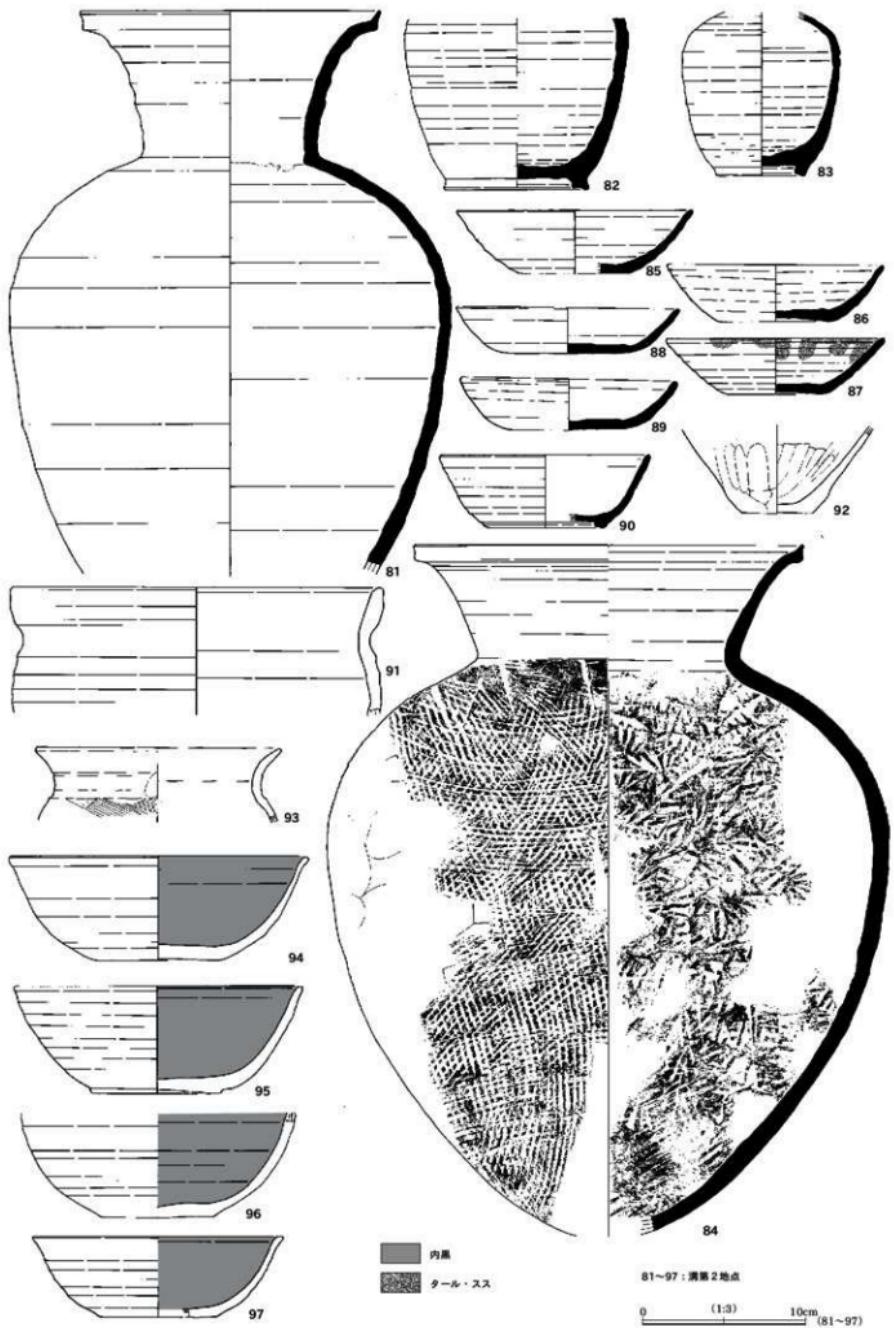
14~21: カマド

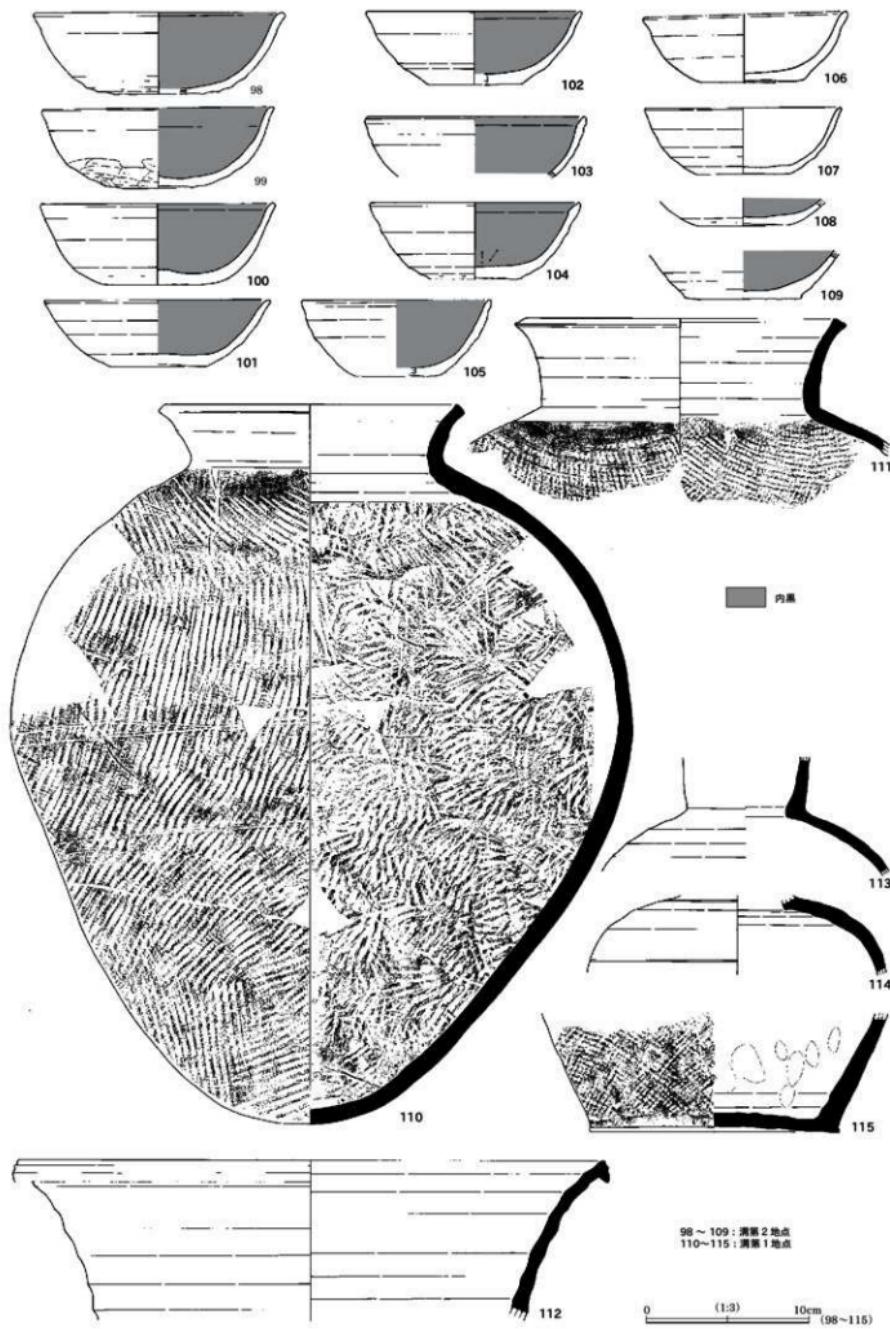
0 (1:3) 10cm (14~21)

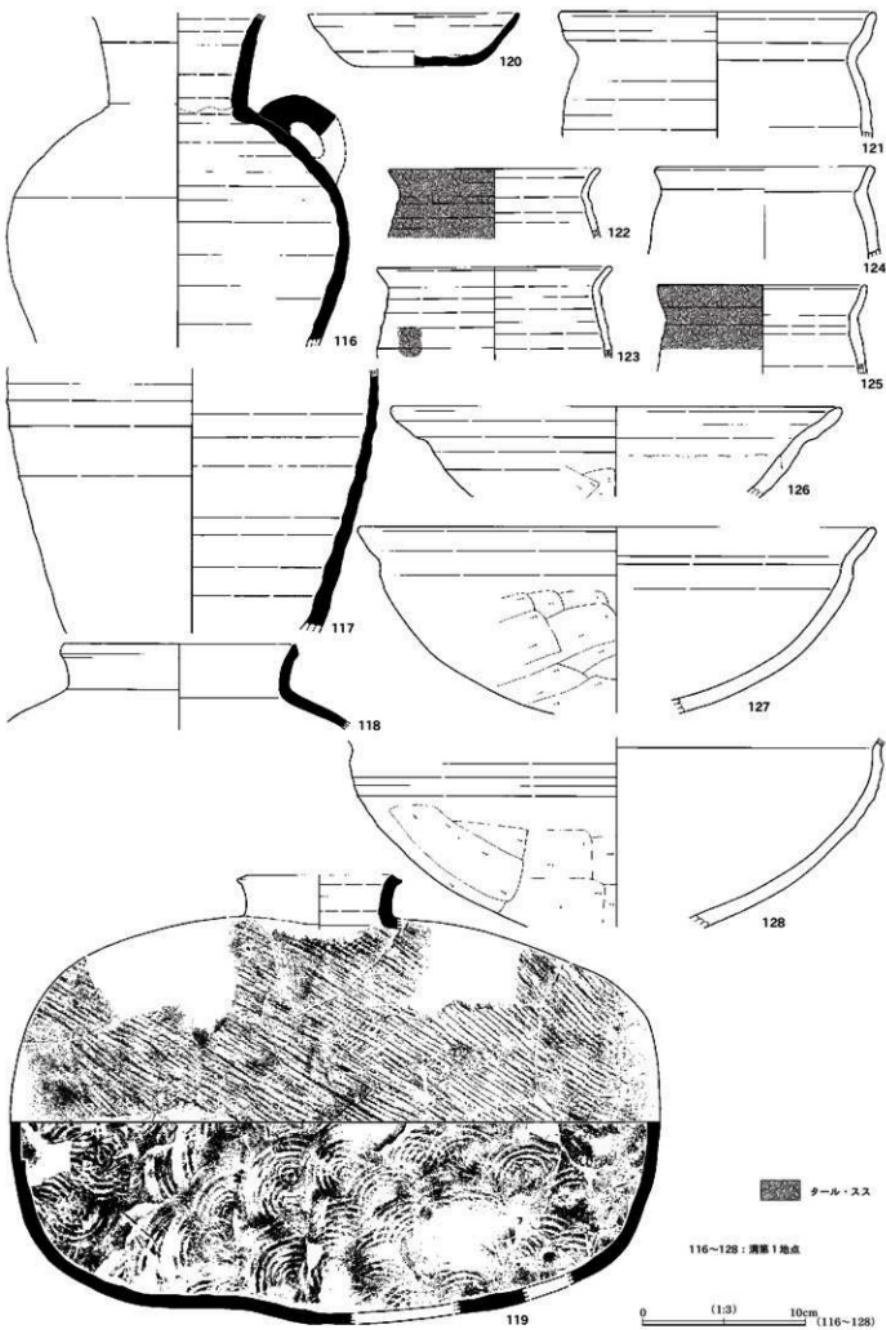






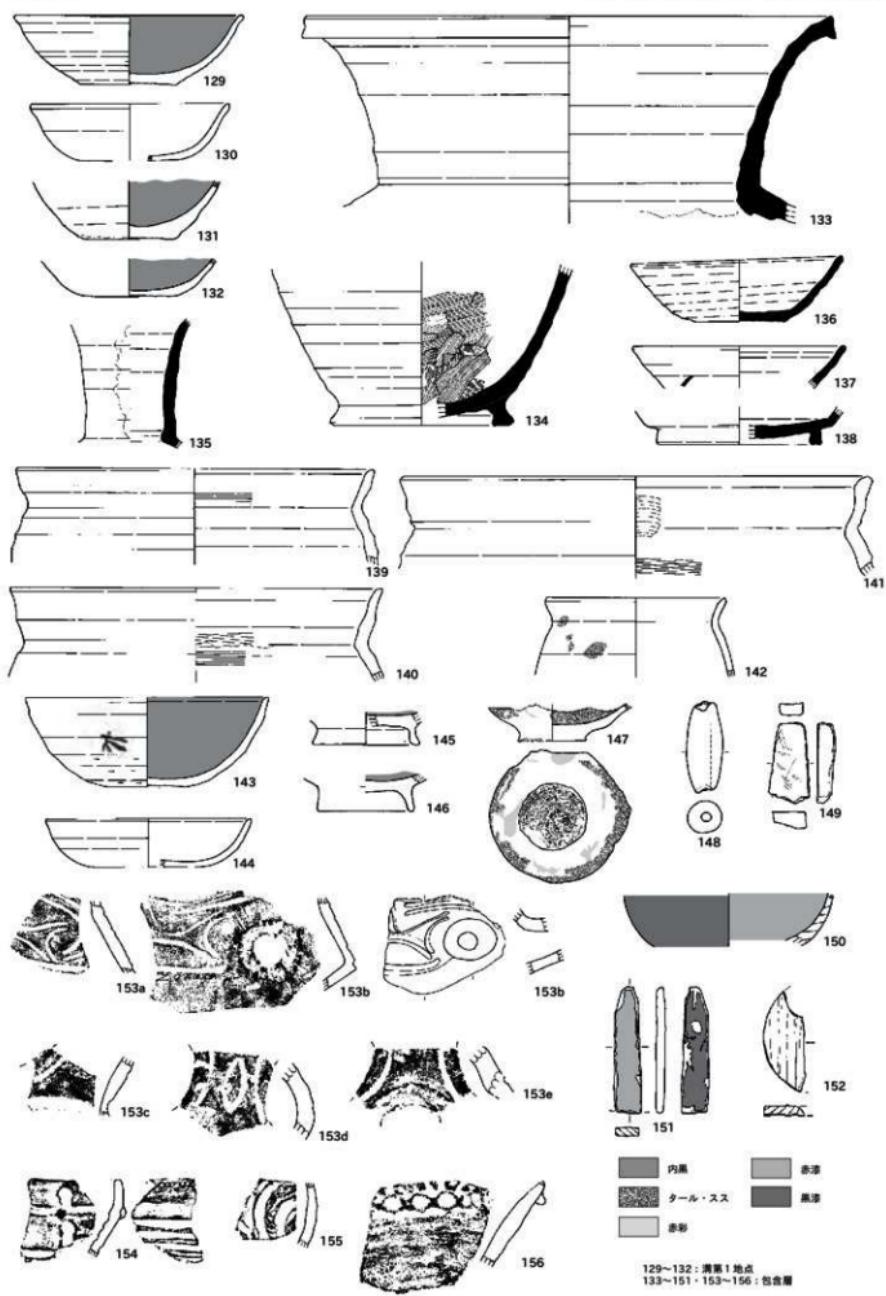






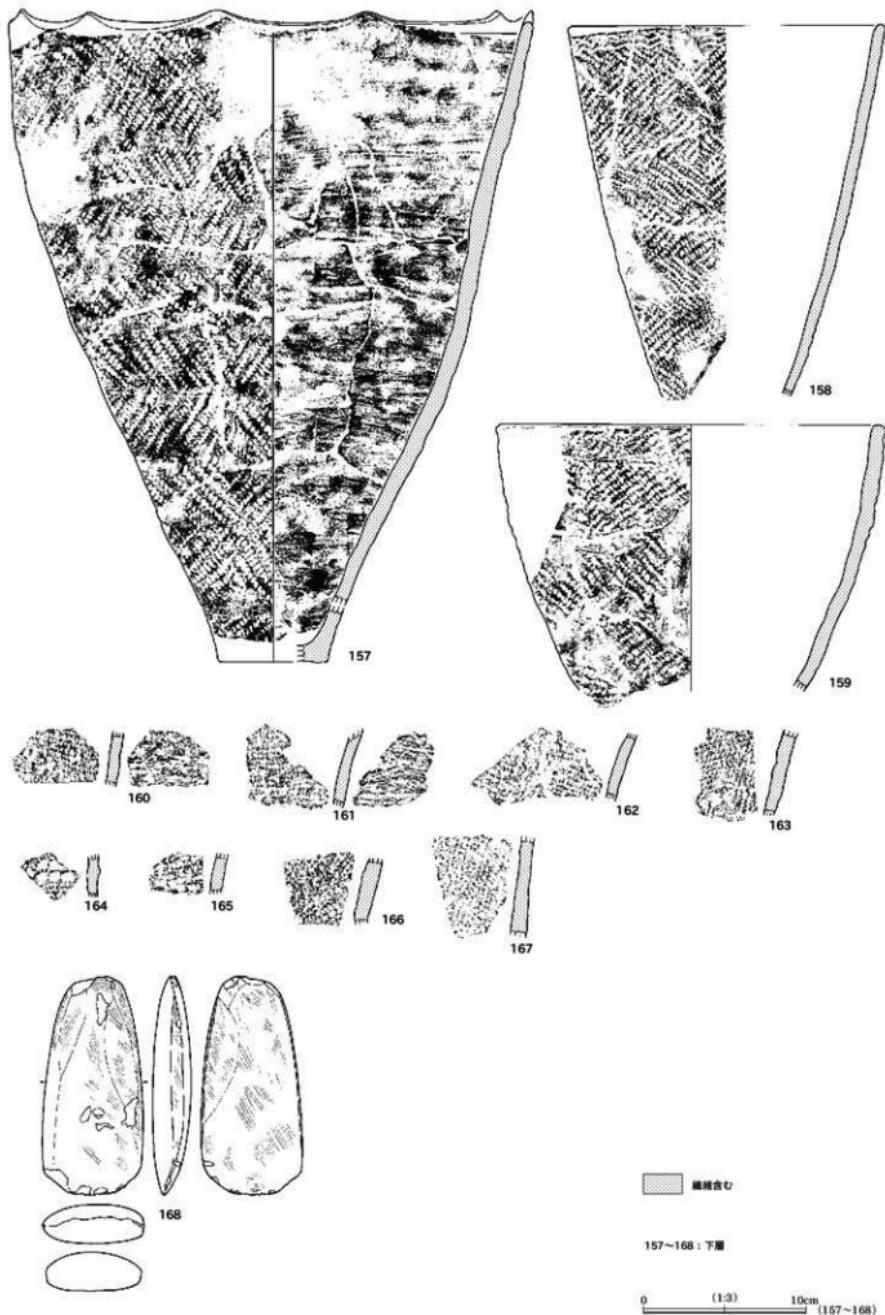
116~128: 漢墓 1 地点

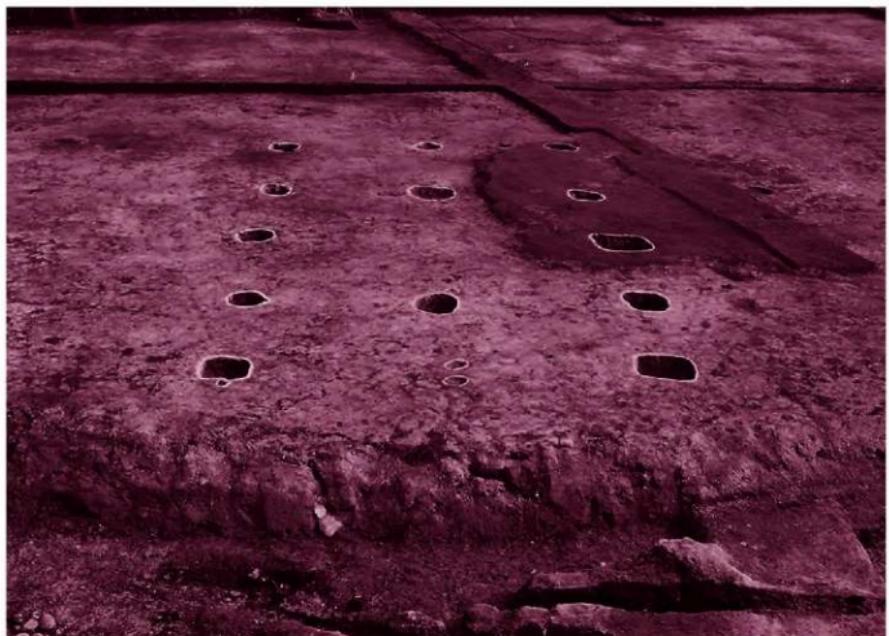
0 (1:3) 10cm (116~128)



129~132: 漢東I地点  
133~151・153~156: 包含層

0 (1.3) 10cm (129~156)





SB1



6・7区 完掘状況



確認調査全景（南から）



基本層序（3区）



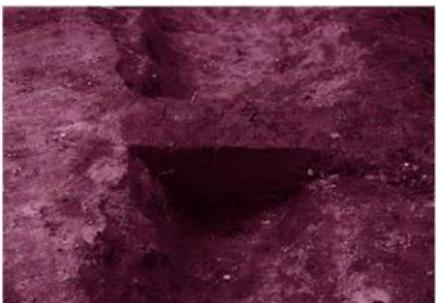
1~3区 全景



1~2区 全景



4区 全景



SD1 セクション



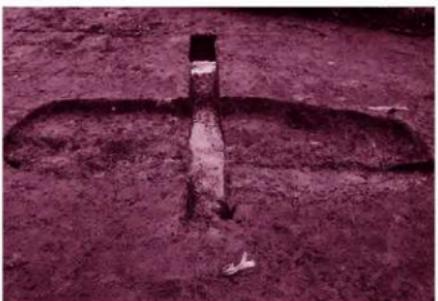
SD1 完掘



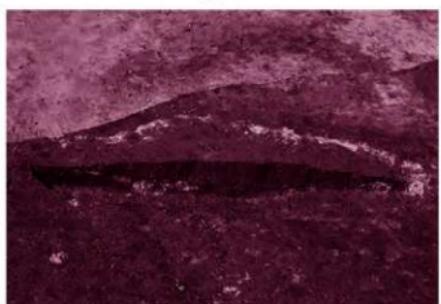
SK2 東西セクション



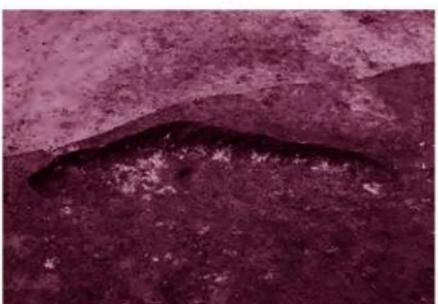
SK2 南北セクション



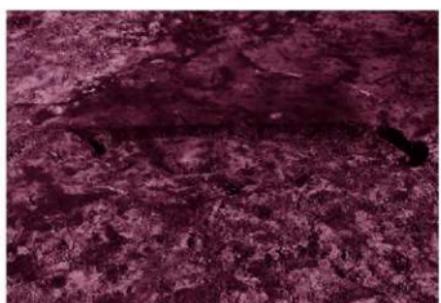
SK2 完掘



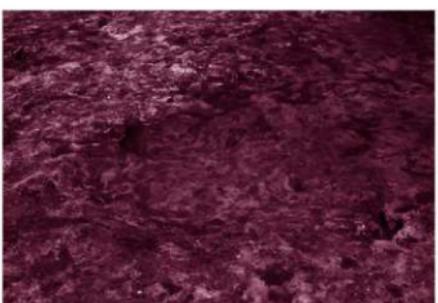
SK3 セクション



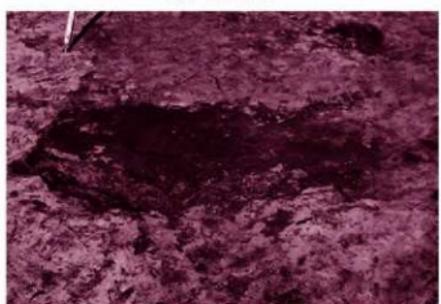
SK3 完掘



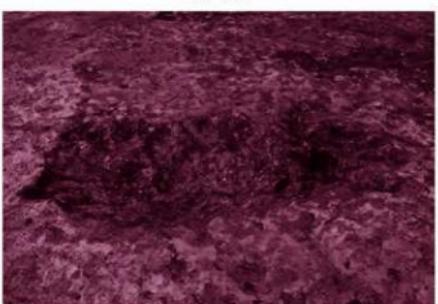
SK4 セクション



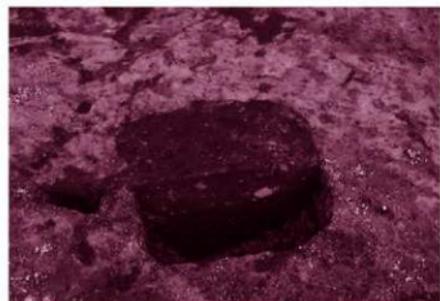
SK4 完掘



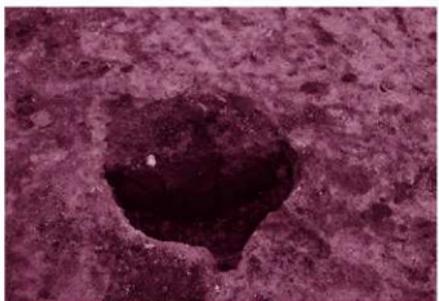
SK5 セクション



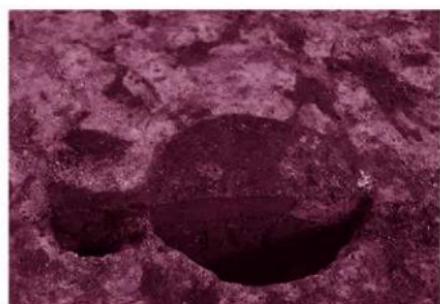
SK5 完掘



SB1 P1 セクション



SB1 P2 セクション



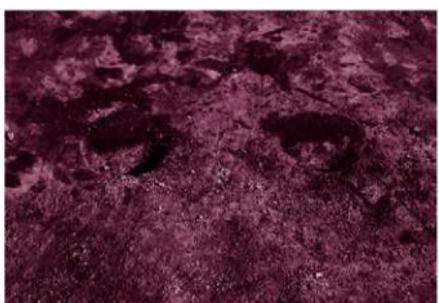
SB1 P3 セクション



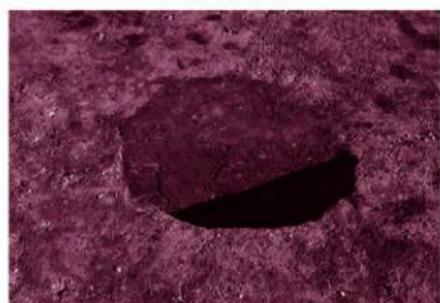
SB1 P4 セクション



SB1 P5 セクション



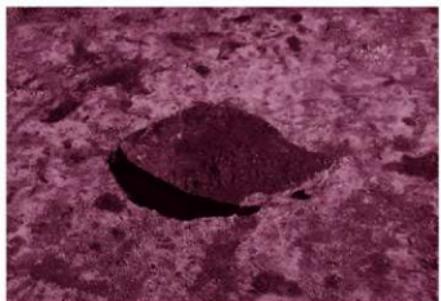
SB1 P6・7 セクション



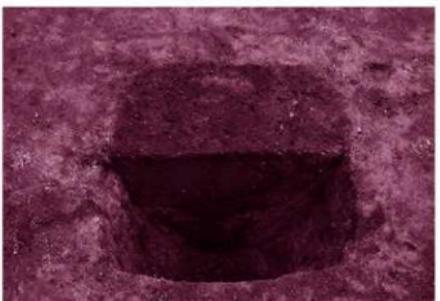
SB1 P8 セクション



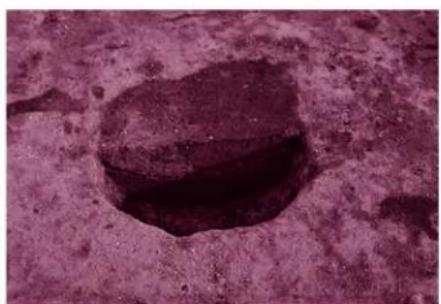
SB1 P9 セクション



SB1 P10 セクション



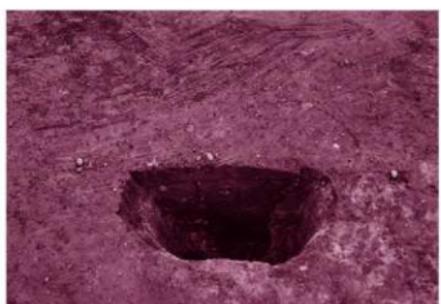
SB1 P11 セクション



SB1 P12 セクション



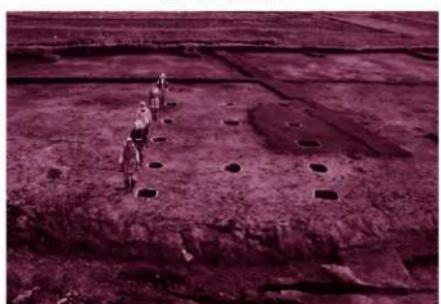
SB1 P13 セクション



SB1 P14 セクション



SB1 P15 セクション



SB1 完掘（西より）



SB1 完掘（北西より）



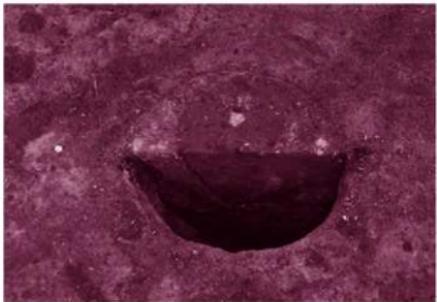
P33 セクション (P3区)



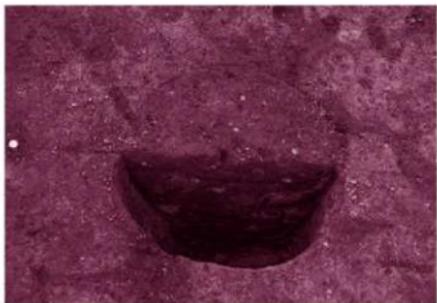
P34 セクション (P3区)



P35 セクション (P3区)



P38 セクション (P3区)



P42 セクション (P3区)



P43 セクション (P3区)



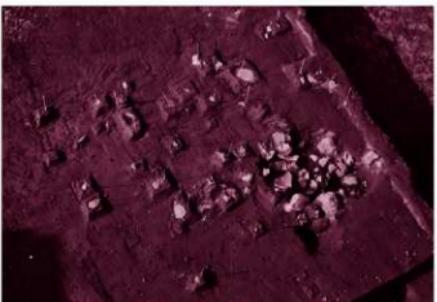
P3区柱穴群・SD4 完掘 (西より)



P3区柱穴群・SD4 完掘 (北より)



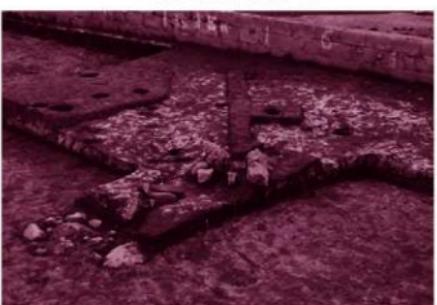
カマド付近 遺物出土状況（上面）



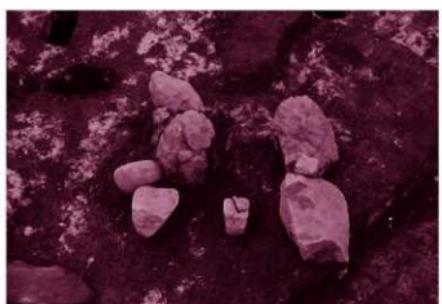
カマド付近 遺物出土状況（上面）



カマド 検出状況



カマド 検出状況



カマド 検出状況



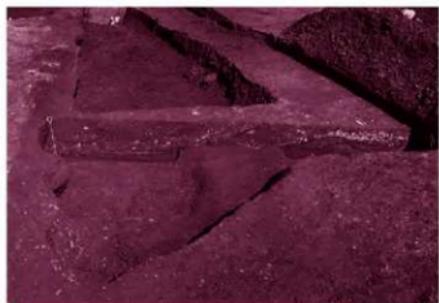
カマド 検出状況



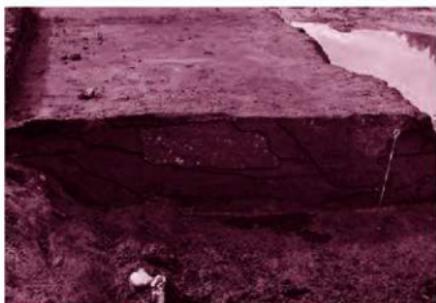
カマド部 焼土



カマド部 土層断面



SD4・SD5切り合い セクション



SD4 セクション



溝（旧河道） セクション（A-B）



溝（旧河道） セクション（A-B）



溝（旧河道） セクション（C-D）



溝（旧河道） セクション（C-D）



溝（旧河道） セクション（C-D）



溝（旧河道） セクション（E-F）



溝（旧河道） 遺物出土状況（NO 区）



溝（旧河道） 遺物出土状況（NO 区）



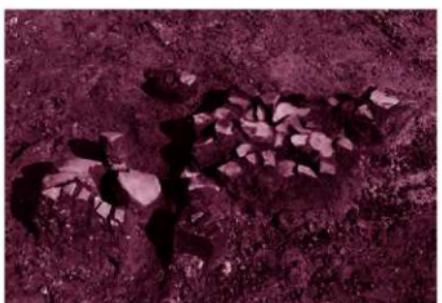
溝（旧河道） 建物出土状況（NO 区）



溝（旧河道） 完掘状況



下層縄文土器 出土状況（P2 区）



下層縄文土器 出土状況（P2 区）



下層縄文土器 出土状況（P2 区）



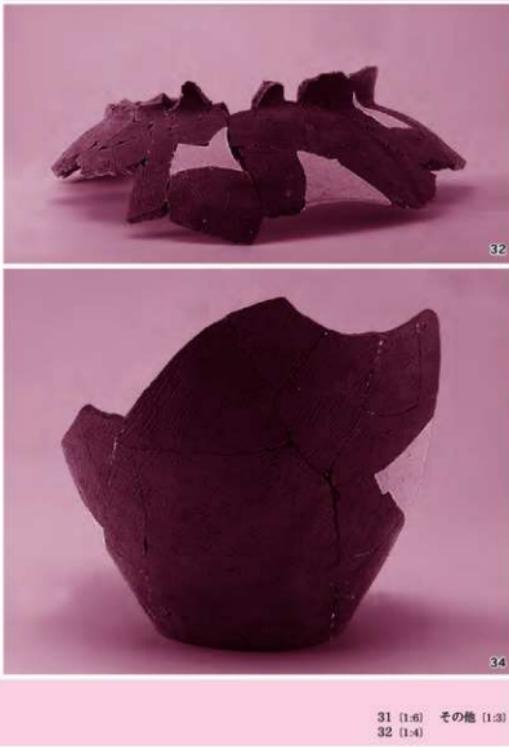
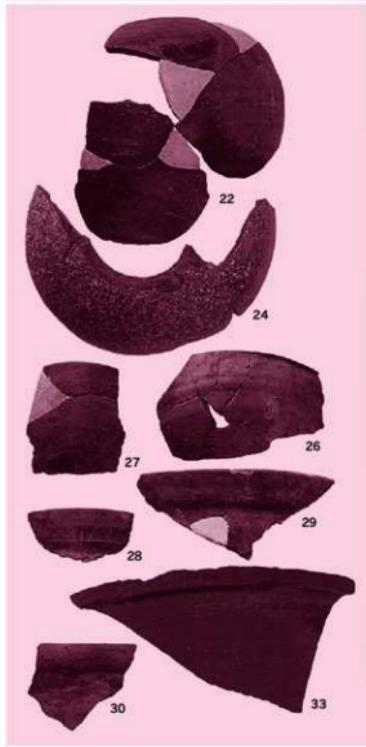
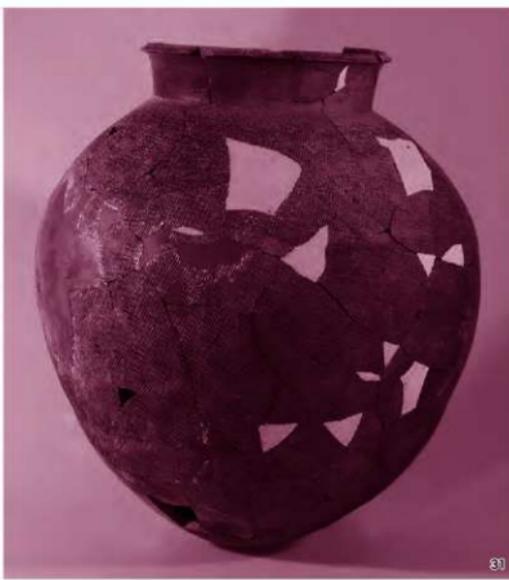
下層 完掘（P2 区）



3

全て (1:3)





31 (1:6) その他の  
32 (1:4)



35



38



35



36

39



40



37



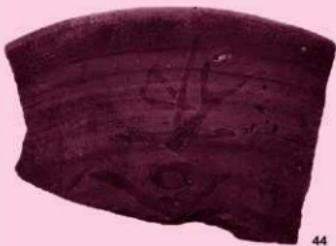
42



41



43

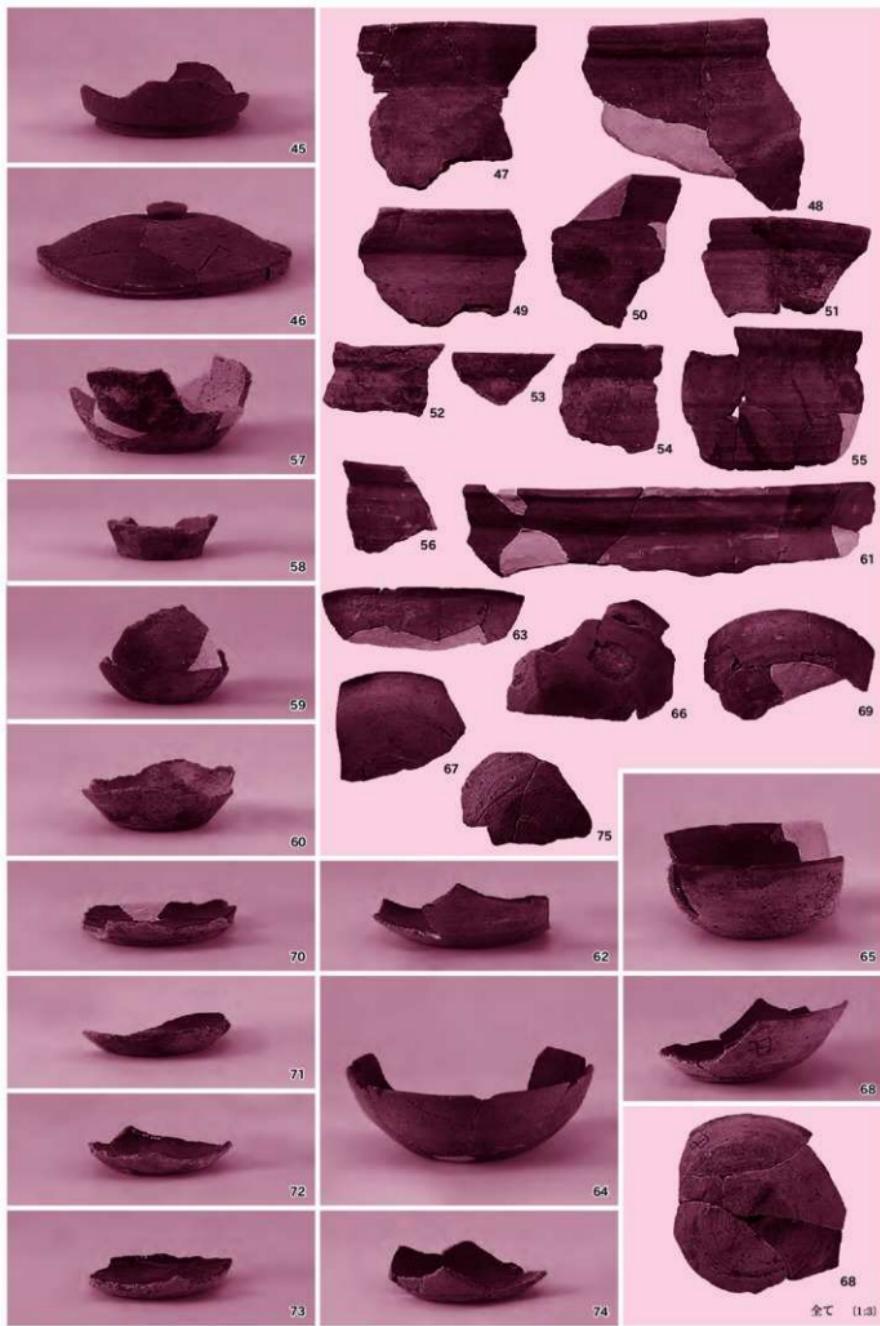


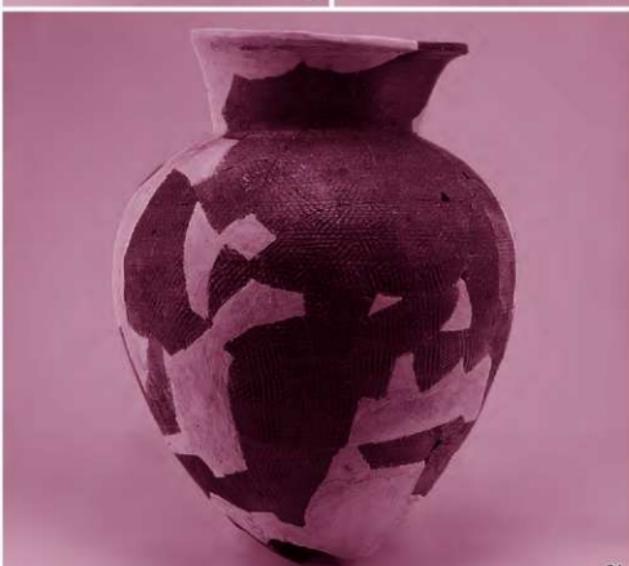
44

35 (1:4)

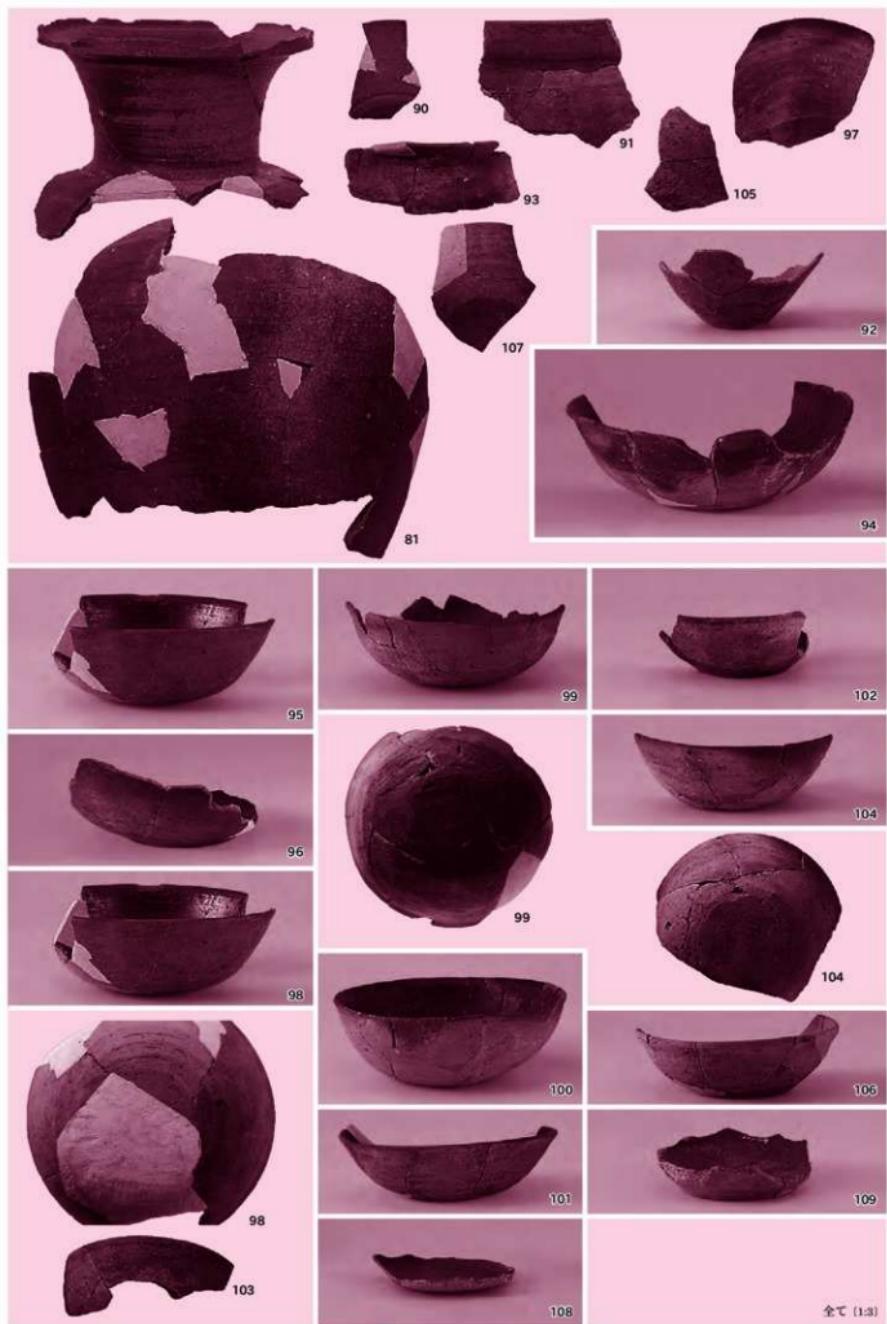
44 (1:1)

その他 (1:3)

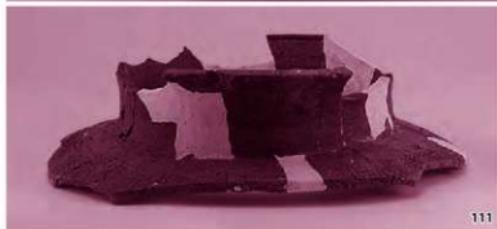
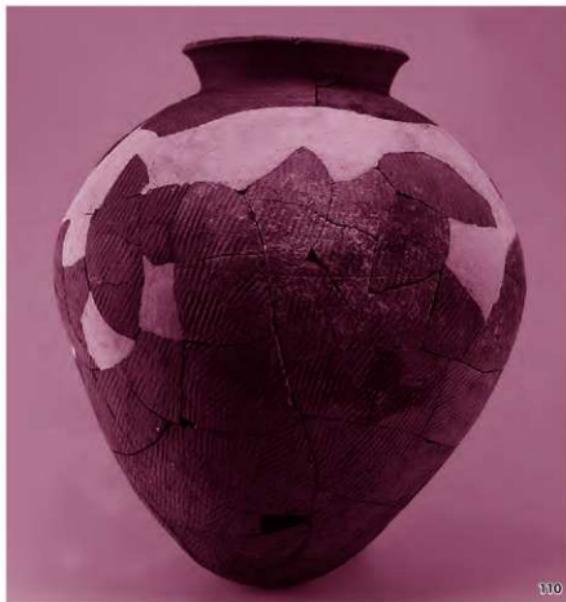




84 (1:4)  
その他 (1:3)



全て (1:3)



110・119 (1:4)  
その他 (1:3)





## 報告書抄録

ふりがな	ひがしうらいせき						
書名	東浦遺跡						
副書名	一般国道18号妙高野尻バイパス関係発掘調査報告書Ⅲ						
巻次							
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第170集						
編著者名	高橋保						
編集機関	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団						
所在地	〒956-0845 新潟県新潟市金津93番地1 TEL 0250 (25) 3981						
発行年月日	西暦2006(平成18)年6月15日						
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
東浦遺跡	新潟県妙高市 毛尻坂字東浦 31他	15217 349	36度 52分 39秒	138度 12分 16秒	19911111～ 19911122 19920706～ 19921120	6,830	国道バイパス
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
東浦遺跡	集落跡	平安時代	掘立柱建物1基以上 カマド1基 土坑・ピット		須恵器甕・壺・横瓶・杯、有台杯 土師器甕・小甕・鍋・椀・有台椀 灰釉壺		
	遺物散布地	縄文時代前期	遺構なし		縄文土器深鉢・磨製石斧		

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第170集  
 一般国道18号妙高野尻バイパス関係発掘調査報告書Ⅲ  
 東浦遺跡

平成18年6月14日印刷  
 平成18年6月15日発行

編集・発行 新潟県教育委員会

〒950-8570 新潟市新光町4番地1  
 電話 025 (285) 5511

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団  
 〒956-0845 新潟市金津93番地1  
 電話 0250 (25) 3981  
 FAX 0250 (25) 3986  
 URL <http://www.maibun.net>

印刷・製本 長谷川印刷

〒950-2022 新潟市小針1丁目11番8号  
 電話 025 (233) 0321